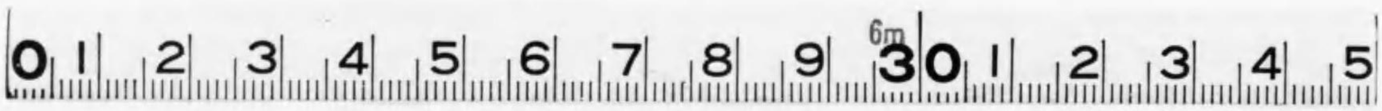
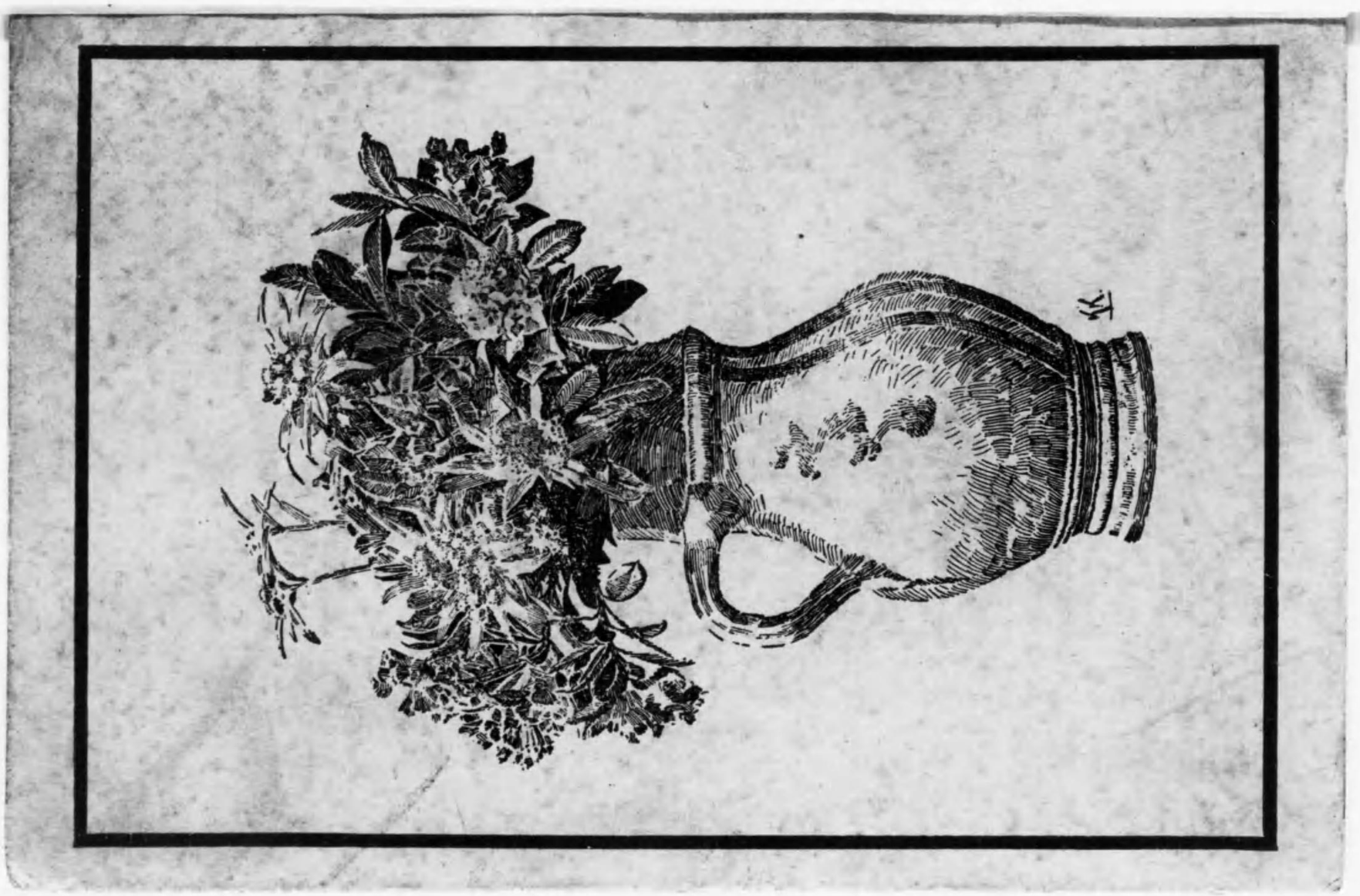
投

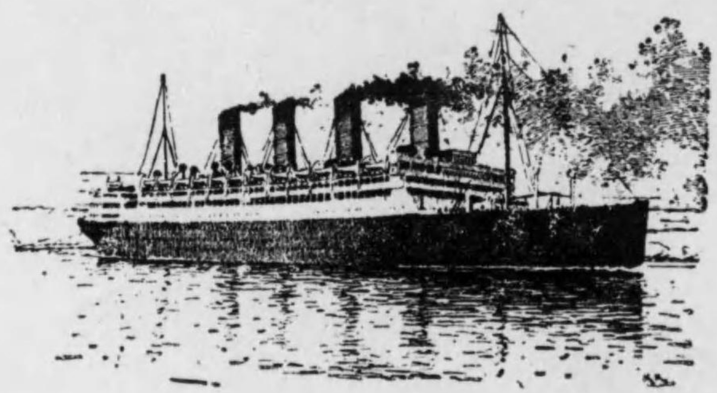




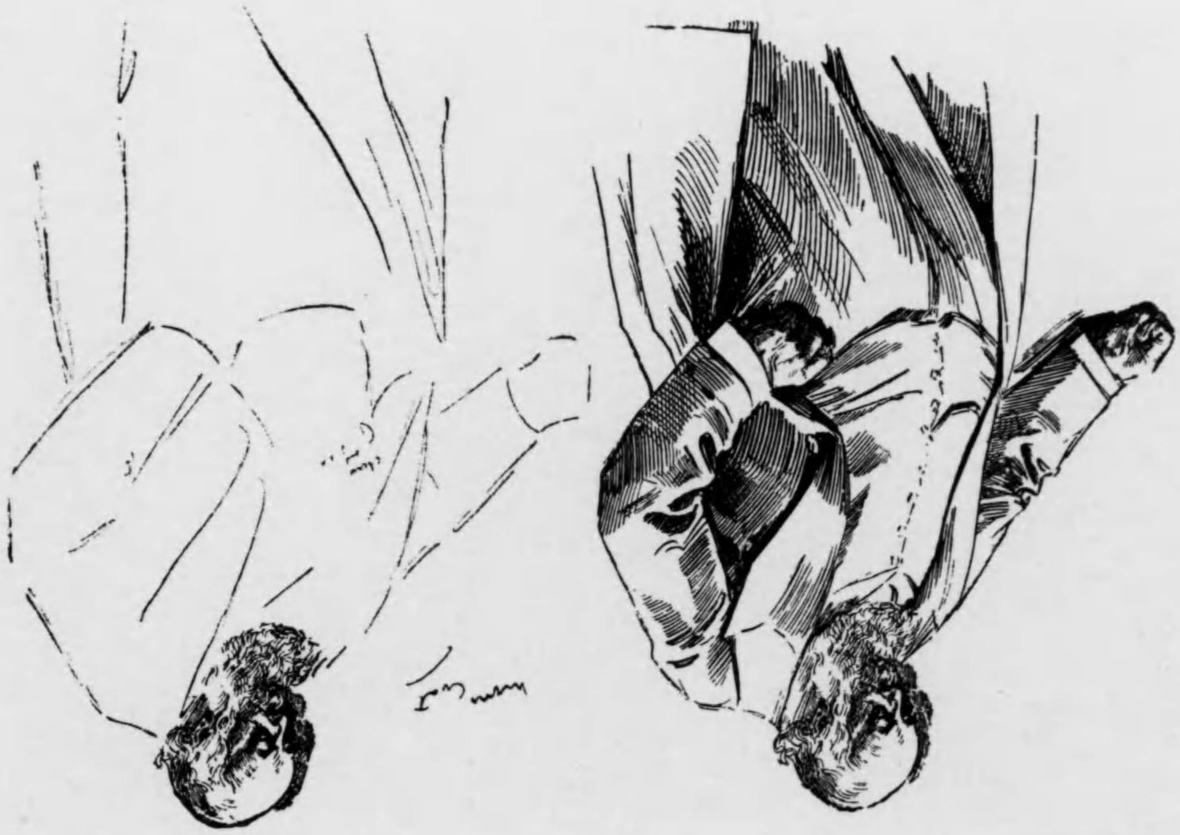
特223
710

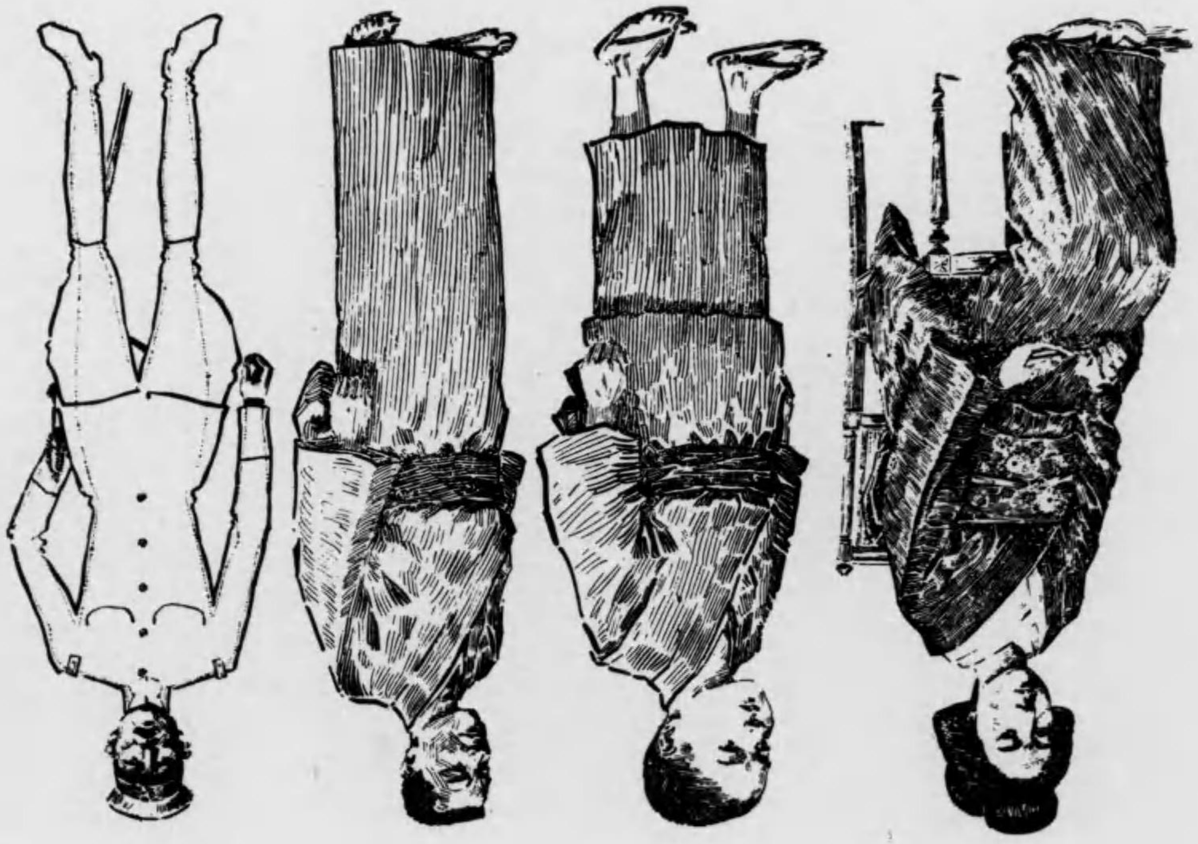
方き描の畫ンペ

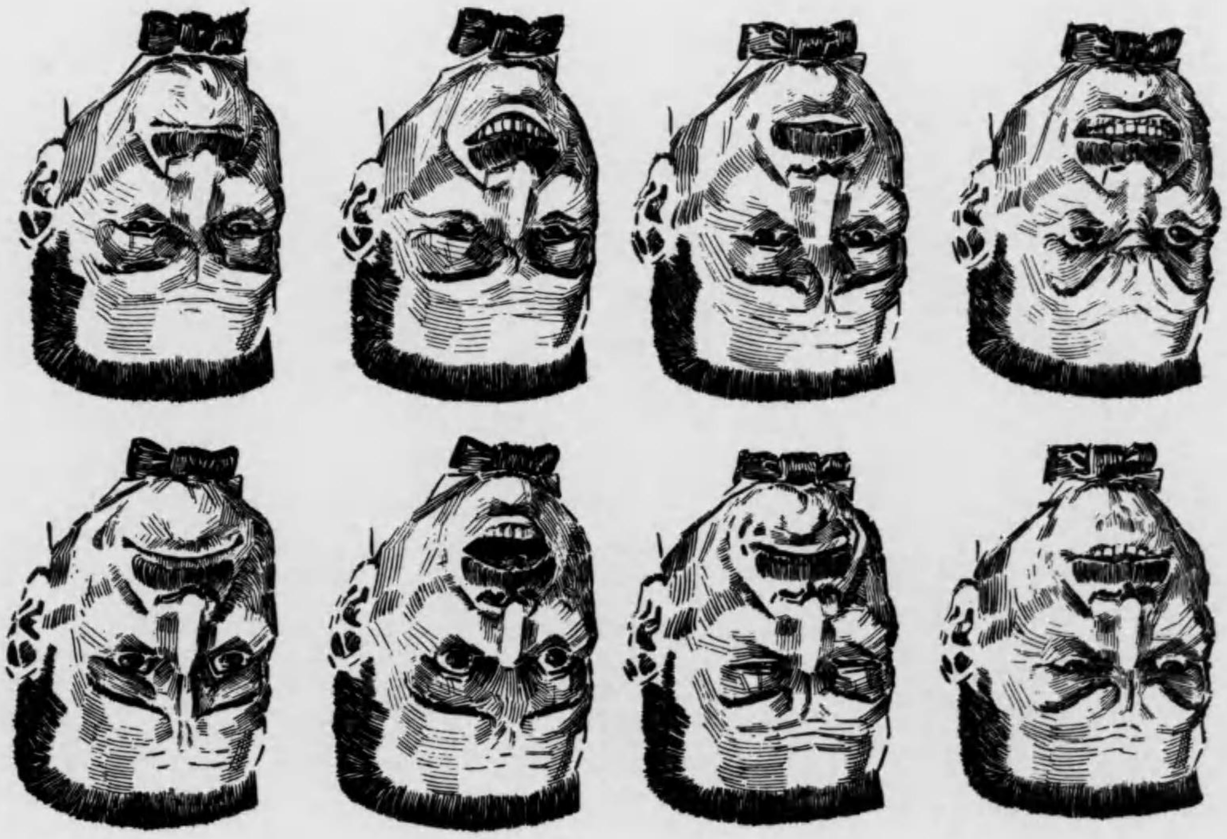
著一勝島樺



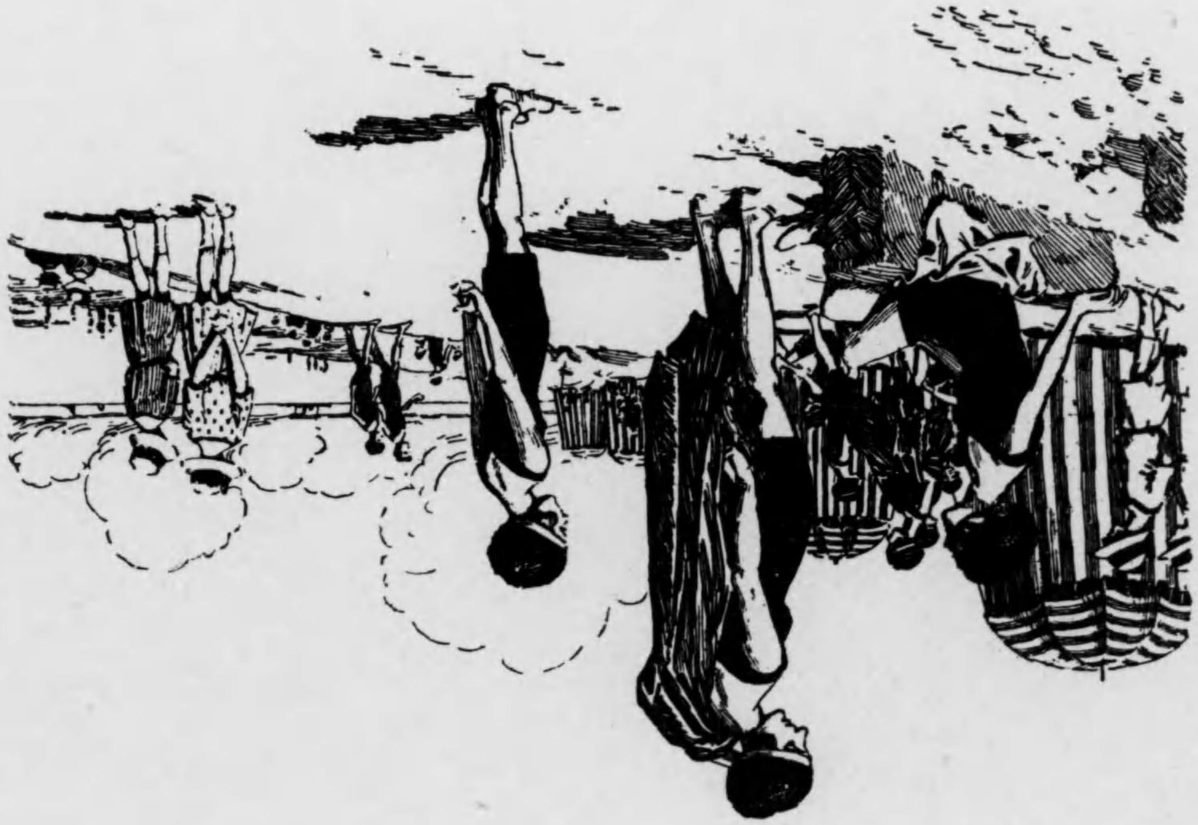
東京・弘文社・出版

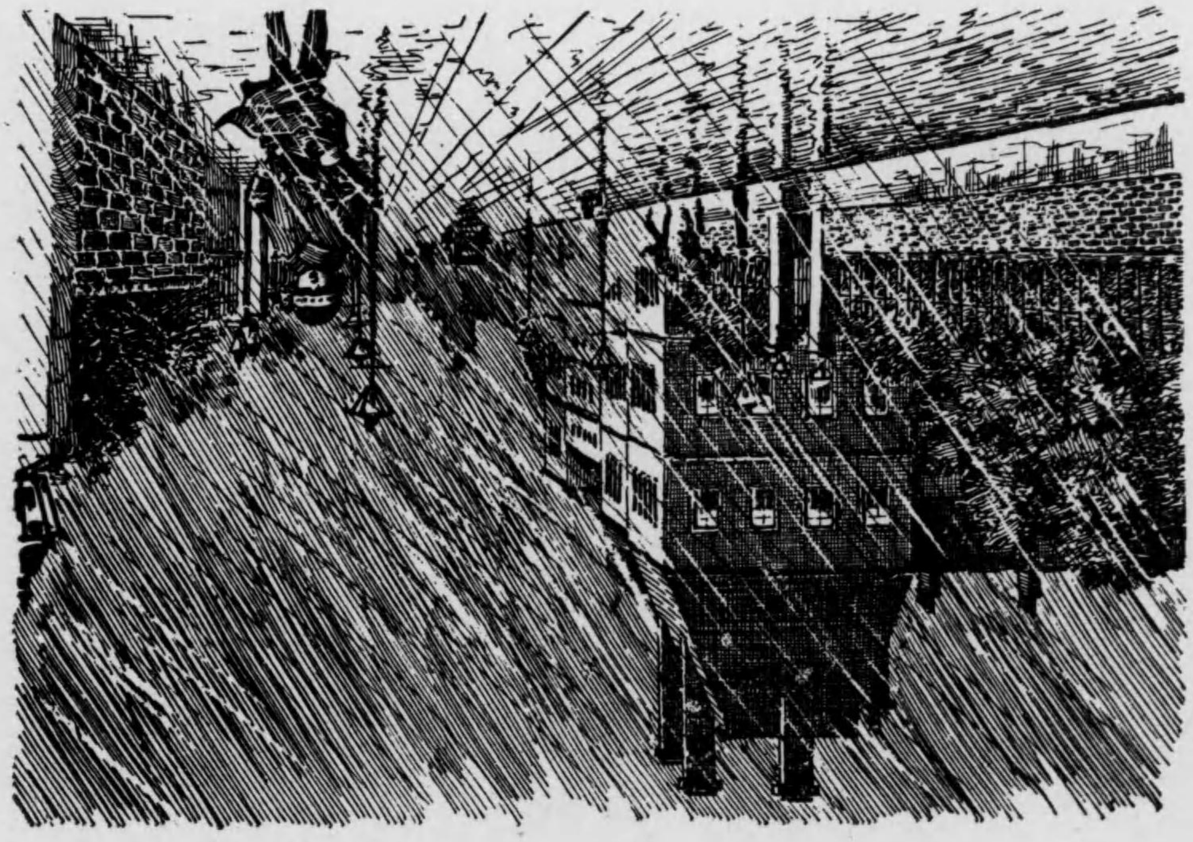


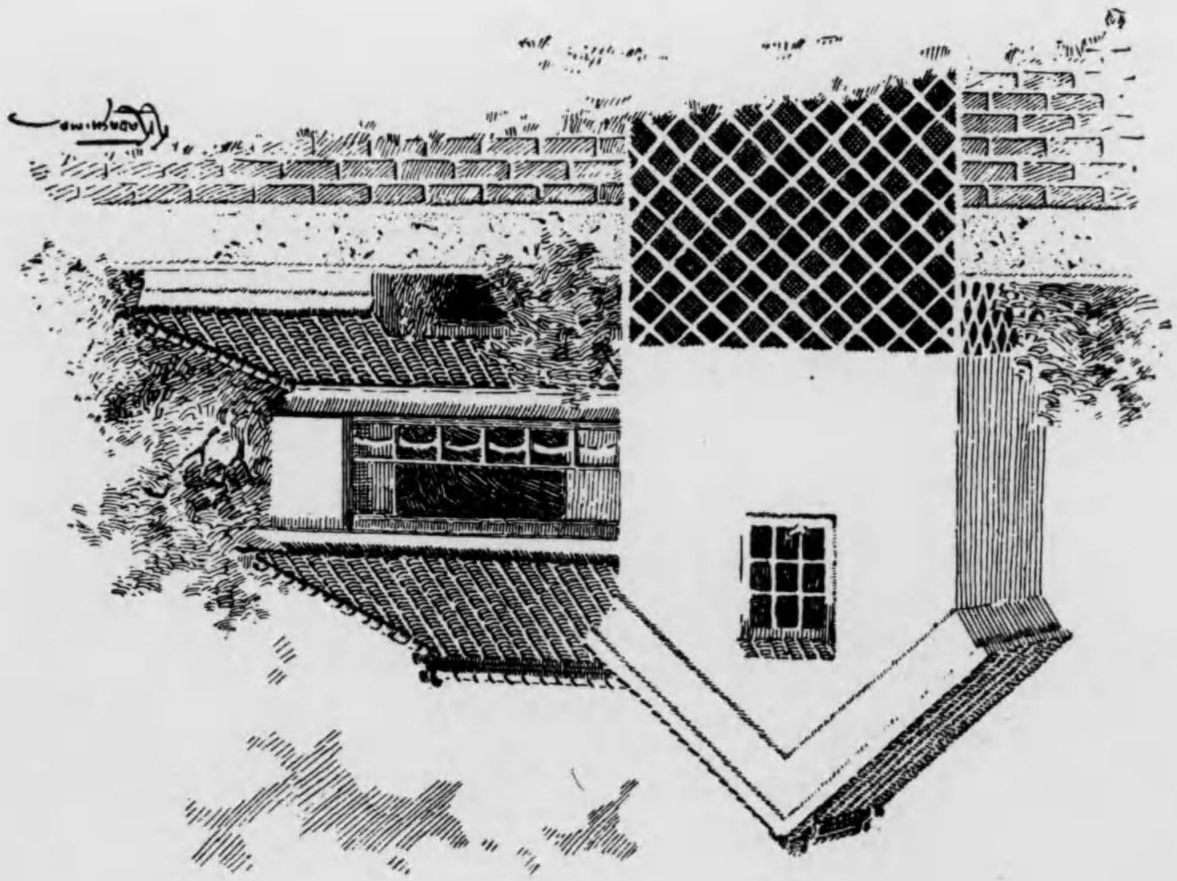


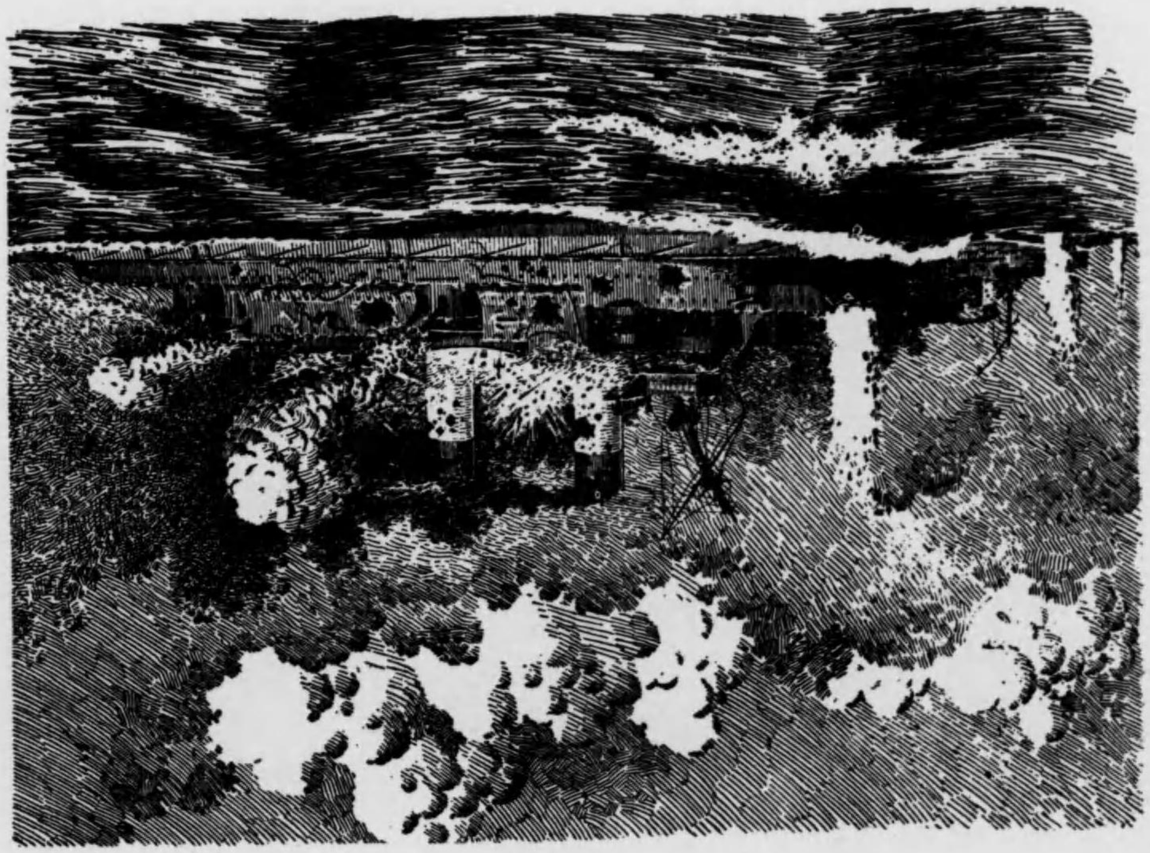


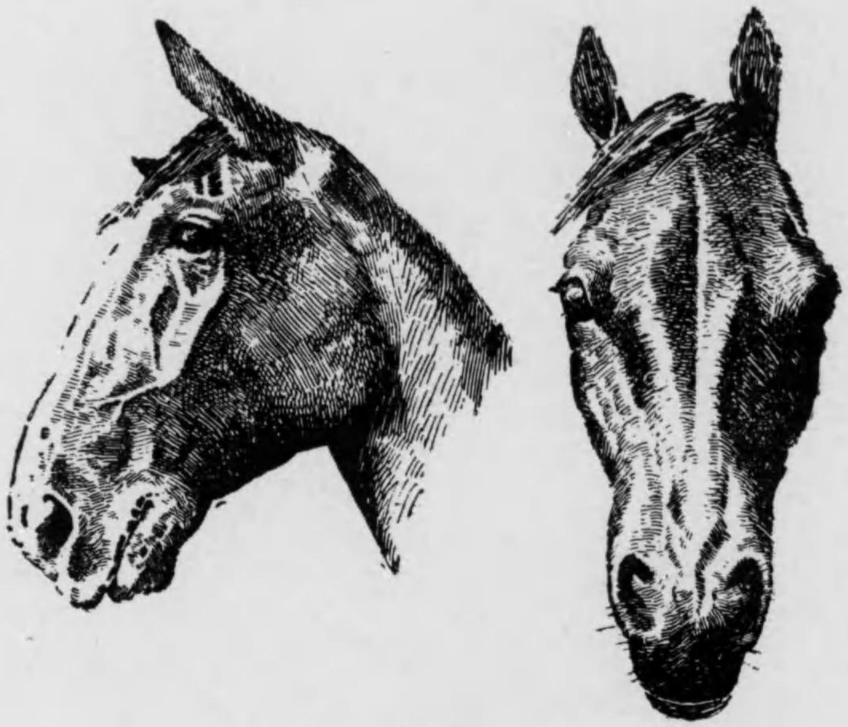
KK.











序

近來、美術に對する趣味普及が年々盛んになり、我々の日常生活の精神的方面に於て、缺くべからざるものとなつて來たことは、喜ぶべきことである。

都會に住まつてゐる者は、常に美術展覽會などが催されて自然と自分の愛畫心を滿足し得られ、また勉學する機會も多いが、地方にあつてはその機會も少く、且つ良き指導者の尠きに嘆く人もあらう。

本書は、ペン畫に就いて、主として餘暇を求めて研究される人や、地方にあつて指導の師を得られざる勉學者の爲めに、ペン畫

全般に渉つて說いたものである。

美術は感ずべく味ふべくして、之を文字を以て解き、言語で傳へることは寧ろ難事である。こゝに初步の學習者にペン畫の凡そ如何なるものかを知り、その研究に便宜を與へることを得て、この小冊子から自然の美を引き出すことが出來たなら編者の滿足とするところである。

著者

目次

繪畫の定義……一
ペン畫……七
描畫の態度……九
材料と用法……一一
描畫法……一七
線……二三
構圖……二五
陰影……二八
スケッチ……三〇
背景……三三

目次

ペンの運び方……三五
人物畫……三八
人體……三八
顏……四一
男と女……四二
子供……四五
老人……四七
表情……四八
人體の權衡……五一
臂の長さ……五四
背後の幅……五六

正面顏貌……五七
側面顏貌……五九
靜物畫……六三
風景畫……六七
描法……七二
樹木……七四
草……七六
花……七八
山、獄……八〇
河(流)……八一
海……八三

船……八四
空、雲……八五
動物畫……八七
馬……八八
羽毛……九三
應用ペン畫……九五
方法……九八

目次終

ペン畫の描き方

樺島勝一著並畫

繪畫の定義

畫とは、或る材料を以て、或る平面の上に自然の形容を描寫したものである。

自然とは何であるか。云ふまでもなく我等の五感に感觸す

る處のものは悉く自然である。然しながら繪畫に最も密接なる關係を有して居るものは眼に感じたる自然である。模倣は人間の天性である處から、自分の眼に感じたる自然の眞似がして見たくて、適宜の平面に之れを模したのが繪である。自然は無限に大きい。之れを或る平面に寫すとすれば。物によつて皆その大きさに、或る制限がある。因つて繪畫に模さゝるは必ず眼に映じた自然の一部でなければならぬ。

そこで眼に感ずる自然は、誰れも同じことであるかと云ふに、決してさうではない。景色を觀て樹木が何本あるとか、樹は梅松だとか、彼處に居る鳥は何鳥だとか、さう云ふことは視力の完全なものには誰れにでも分るが、これは眼を通じて頭腦に其物體を知るのであつて、感じるのではない。感じると云ふのは、鳩はどんな形をして居るか、飛んだ時に下から見れば腹の白い處がどの位見えるか、ある草屋根はどの位右へ傾いて居るか、屋根のどの邊が破れて居るか、梅の葉と松の葉とは、同じ葉でもどれ程の差があるか、をこれ等が感じることである。

人は誰れでも自然を觀て、種々な物體を見分けるばかりでなく、感じても居るには違ひないが、畫を學ぶ人程に感じが鋭くない。これは畫に趣味を持つ人と持たない人と、その感じが違ふばかりでなく、同じ畫を描く人にもその經驗やら性質等で皆各自觀る處が異つて居る。

自然は我等の前に無限の畫材を提供して居る。例へば同一、

の物でも自然の觀方の異なれる人々が之れを寫しても、その作品は皆趣きの異つたものが出來上る。諸君は忠實に見た自然を寫せばよいのである。

素人の見た自然は誤りであると云ふことは出來ない。素人にはさう見えるのである。子供の描いた人間を見ても、大人が見れば可笑しいが、子供はそれでも人間を寫せたと思つて居る。これも子供自身には甚だ正直であると言はねばならぬ。亦極く初歩の畫學生の描いたものも、斯道に修業した先輩の眼から見たならば、全然成つて居ないものでも、初歩の其人自身は一生懸命に描いた積りであるから一概に誤りとは言へない。然し畫の修業の階段には一つの水平線がある。勿ち人は各々自然の感じ方が違ふが、或る時機に至ると物の形や色の感じ方に相一致してくる。この一致した水平線以上のものを假りに正と稱へ、此の水平線以下のものを假りに誤りと稱する。而し畫を學ぶと云ふのはこの水平線に到達する爲めである。亦繪畫の批評にも此水平線を一方の標準としなければならぬ。

こゝに於いて畫を學ぶ主眼は、眼の教育である。例へば此處に一つの大きな工場があつて、其建築の前にも横にも幾百と云ふ澤山の窓があるとする。一人が其建物の眞正面に立つた。この時此人は先づ相應に正しく窓を觀ることが出來る。それは窓が皆同じ大きさである、そして一定の距離を置いて明けられてあることを觀る。然し今度彼れが其建物の端へ歩いて來

て、斜めに之れを觀たならばどうであるか、彼れは尙ほ漠然と正面から見た樣に窓の大さが皆同じで窓と窓との間も定つて居ると思ふ、然るに或る畫家を連れて來て、彼れの立つて居た處に立たせて、斜に建物を觀させれば、畫家はこの時、窓の大さが皆違つて居ると言ふであろう、之れは極端な例であるが、眼の敎育の有ると無いとでは、これだけの違ひがある。ゆゑに諸君は先づ正しく物を見得るようにならなければならぬ。遠近法は諸君に或る法則を敎へる、それは遠近の法則を大體知つて置いて、正しく自然物を觀て、寫すようになるのが肝心である。自然物に就いて寫して居る間に、遠近の法則は自ら分つて來る。

眼の敎育は形ばかりでなく、濃淡にも色にも相當の敎育を經なければならぬ。雪も一般の人は常に白いものと思つてゐるが、日光を受けて黃色くも見え、亦陰つては蒼くも見えるのである。髮の毛も每も皮膚より黑い樣に思はれるが、逆光線に於いては人の顏の影になつた皮膚の色は、時に頭部の光よりも暗いことを感じる。ゆゑに諸君は、畫を學ぶに就いて、眼の敎育が大切であることは、理解されたであろう。

ペン畫

ペン畫には、繪畫の一部門であつて、古代(歐洲)からあつたもの

である。伊太利の大家ラフエイエルは蘆のペンを使用した。亦佛蘭西のミレーの如きは羽ペンを用ひ、その他銅、鐵、硝子等のペンを用ゐたものである。亞鉛版の發明と共に著しく發達した。歐米の新聞雜誌等の挿繪としてペン畫のないものはないと云つてもよい。我國もペンが輸入されてから一般に實用化されて。近年亞鉛版の輸入と共にペン畫も、一層廣く研究されて、殊に諸君が日常見られる新聞雜誌の大多數は、挿繪としてペン畫が用られてある。

ペン畫は、一度描いたところを、ゴムで消すことは出來ない。線も鉛筆を使つたように淡くつけることも出來ない。これ等の材料の性質上の不便が、ペン畫の特色であつて、眞白な紙に、眞黑な線を刻むところに、ペン畫として面白味がある。從つて線には殊に重きを置かなければならぬ。

材料も油繪、水彩畫等に比較して、極めて簡單で僅か一本のペンとインキによつてペン畫の目的が達せられるのである。

描畫の態度

一體、繪にはかう描くべきものと云ふ規則はないから、難かしいやうで、却つて都合がよいのである。初めは子供時代の無邪氣さに立歸つて、どんな變梃なものでも、自分で勇氣を出して、勝

手に描いて見る方がよい。その内には自然と解つて來て、ますます興味が深くなつてくる。

繪を學ぶにも、諸君が日常眼に觸れて居る。花瓶、コップ、果物、皿等のやうな靜物から風景、人物等を寫生する方法と。

日本畫を學ぶ人が臨本を寫して手を慣す方法(模寫)とがある。

然し模寫にも、原畫通りに忠實に寫すのと、自分勝手に解釋して自然の如な氣持で描くのと二つの方法はあるが。この方法は自然を見て描いたのとは餘り違ひはない。

何づれにしても、初めて繪を描く人には、爲めになる方法である。そして勢ひ他人の描いたものを注意して見るから、知らず知らずに繪畫の技巧上の事を了解して、容易く練習が出來ることになる。

材料と用法

ペン畫の材料としては、ペン、鉛筆、畫紙、インキ(墨汁)消ゴム、畫板等があればよいのである。

ペンは、何處の文房具店でも、ペン畫用のものを賣つてゐる。一般にはGペンやスペンセリアンを使用してゐるが、專門家用としてギロット會社の畫ペンとして幾種類もあるが、太いものと、普通(中位)のものと、小さなものと三種位あればよい。亦鷲ペ

ンを使用するとなか〳〵面白いものが出來る。

ペンは使つた後は、必ず筆洗で充分にインキを落しておかないと、使つた儘放擲きして置くとさびつく恐れがある。

鉛筆は、折れ易き質や、紙面を損じるやうなものは成るべく使はない方がよい、理想としては舶來のHBと、BBBBの柔かいのを使へば、線もよく引けるし、消すにしてもよく消せる。

畫紙は、ケント紙のような紙面の滑らかな質の物を使ふか、一般に使つて居る畫用紙でもよい。

インキは、諸君が日常に使つてゐるインキなり墨汁で充分だ。

消ゴムは、畫を描く初めに、大體の線を鉛筆で取つて、そしてインキで仕上るのである。仕上が終つたら鉛筆の線を叮嚀にゴムで消すのである。消すにも、インキが充分に乾いてからでないと畫面が汚れる恐れがある。

畫板は、畫紙をピンで隅を留めておいて描くと、動搖もせずに大變具合よく描ける。

以上でペン畫としての材料であるが、彩色を施すときに使ふのは水彩用繪具である、日本製のものは粗惡で缺點が多いから、必ず外國製のものを選ぶがよい。種類は拾二色位の繪具箱入を買つてもよし、亦鉛管入りのもある。

紅　クリムリンレーキ
　　ピンクマダー
赤　ヴアミリオン

藍
- **プルツシヤンブリユー**
- **オルトラマリン**
- **コバルトブリユー**

黄　**クロームエロー**

緑　**エメラルドグリン**

白　**チヤイニスホワイト**

黒　**ブラツク**

以上の色種があれば充分だ。

繪具が古くなると固くなつて筆に付き難いことがあるから、その時は水に少しグリスリンを混ぜて塗つて置くと軟くなるが、尙固い時は繪具を水に數時間浸してから硝子板の上で、ナイフで細かくしてグリスリンを混ぜて繪具箱に入れて置けば軟くなる。

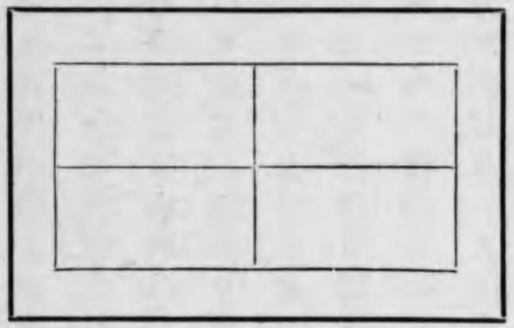
筆は着色の時に必要である。水彩用のもので、太いのと細いのと二本位あれば充分だ。筆はゼーブル猫毛が第一と稱されてゐる、これは水含みがよくて筆尖が軟くて腰が強いので最も適してゐる。樹木や草等の細かい部分には細筆を用ひ、空や海等には太いものを用ふのである。

海綿は、筆の代用に適當に切つて、波、霧、雲等に用ひる、亦濕つた海綿で色の調子を取ると柔い自然な調子が出る。

描き損じたときは、その個所をナイフで消すか、白い繪具を塗るか、亦は紙を張付るか、何づれの方法でもよい。ナイフで消る

ときはナイフの脊で磨くと紙面が滑らかになる。

見取枠は描くべき對象の、果物、花等を陳べて見ても、どの範圍迄畫面に入れたらよい構圖を得られるかを、判斷し易いから使用するのである。普通ハガキ大の厚紙の中を長方形に切拔いて、それに十字形に黑糸を張るのである。これをスケッチの時に用ふると、この長方形を透して對象となるものを見れば、構圖として大凡その見當がつく。この十字糸によつて構圖中の物體の位置が容易く知り得られる。



描畫法

描畫法は、先づ第一に形の取り方を研究することである、如何にしたら、眼に見えた物體をその儘間違ひなく紙面に描寫することが出來るであろうか、眼に見た物をその儘寫生することは熟練すれば容易く出來ることであるが、視覺に映じたる形を其の儘、正しく描寫する方法は、透視畫法である。諸君は自分の書物を机上に置いてそれより三四尺離れてその書物を見透した場合に、長方形の書物は如何しても長方形に見えるであろう。

又大道に立ちて連らなれる家屋や電柱を見ても、それ〳〵眼に近い程大きく見え、遠くにあるもの程小さく見える。そして最も遠きにあるものが地平線のある一點に集合するやうになるを見受けるであらう、斯樣に距離や物體の奥行が見えるのは、諸君の兩眼が奥行遠近を認める作用を具備して居るからである。

遠近法は此の原則に依つて、或る物體を何間なり何尺なり隔てゝ見たとき、その奥行の遠近を表示する形の變化を知る方法が、卽ち遠近法である。ゆゑにこの方法を學ばずに寫生した書物は遠近の奥行がなくて、不正確な長方形に描けて、書物の長方形を表はすことが不可能になる。

我々の見える眼界には必ず地平線がある、そして寫生し得る地平線の長さは大凡四十五度乃至六十度又は七十度に止まる。諸君が街の一角に立てば、連る屋根は地平線よりも高く、敷石は下にある。水平線は廣い野原等や海岸に立てば一番明瞭に見える。彼方の水と空とが接觸してゐるやうに見える一線が卽ち地平線である。

平行透視圖法とは畫面と直角なる平行諸直線が、視點に消失すやうになる圖をいふのである。火針、机等の物體にある。地平線に並行した線から消點を見出すのが、斜面透視圖と云ふのである。物體は皆この圖法に依つて間違なく肉眼に見えた儘を寫し出すことが出來るのである。

投影圖法とは、物體には物自身の陰と他から點ずる影とがあ

る。正面に對し光線が、それと平行した右の上より四十五度の角度を以て放射した場合は、片面は陰である。太陽や電氣等の光線が强弱に依つて陰影にも濃淡が生ずる。

如何なる物體を描くにも、紙面に縱横直角線を描き、物體の位置を適當な場所に定めることが必要である。直線はその物體の大體の形態を寫し、正確に直した後、自分に判明する程度までに之れをゴムで淡く消して仕上げに移るのである。仕上げには軟かい鉛筆を以てその物體の明るい部分を淡く、陰の部分を濃い線で描き、そして陰影を加へれば出來るのである。

形態は如何に正確に描く事が出來ても、餘り細部に至るまで寫すことは避けた方がよい。唯陰影濃淡の特徵のみを描いてその性質を表はす事が出來ればよいのである、書物を描寫するにも、一々紙數まで描寫せずに、その內の目立つて居る紙數の陰を描いて、他を省略して恰も數百頁の紙數がある書物に、見えるように描けばよい。

寫生物の單數のときは形を正確に取ることと、陰影濃淡の特徵を囚へて、簡單に描寫して、よくその緻密なる性質を表はすことが出來ればよい、復數となると主從客の三つに分けて、描寫の繁、簡の工夫を要することにある。

諸君が多くの知人に、一時に面會したとき、最も親しき人々の容貌や服裝が、諸君の頭腦に深く印象されるであろう、同時に多數の知人に接した事であるから、同一なる印象を與へさうなも

のであるが、なか〳〵そうは行かぬものである。

スケッチするときも同様で、諸君が主眼と定めた物は、他の從や客位にあるものよりも、一層深い印象を與へるものである。それだけに他の物よりも、緻密に描ける譯である。ところが主從客の區別がなく、總括的に印象を與へるやうに描いたのでは、趣きのない丁度標本圖を見るようになつて、繪としての價値がないことになる。

風景畫、靜物畫にしても、それ〳〵主眼となるべきものがあつて、初めてその面目を維持するものである。これをよく表はすことは大切なことである。

言ひ換へれば、主眼物は面目を維持すべき物であるから、最も注意して描き、そして客位、從位のものは、之を助ける位置にあることになるから、是等は主眼物に比較して遙かに簡單に描くことが必要がある。

線

線といふものは、自然の中に存在するものでない、物象と物象との境界、若しくは物象と空氣との境に線が見えるのである。その物象を描寫するときに、その物象が他の物象、若しくは空氣と境界をなす線を以て表現するのである。ゆえに線は繪畫の

基礎技巧をなすものである。

自然の物象には、質の軟らかいものもあれば、硬いものもある、表面の滑らかなものもあれば、粗らいものもある。それを描寫するには勢ひ、物象の境界卽ち線によらなければならぬ。例へばこゝに四角形の豆腐と煉瓦とを竝べて見てそれを描くとき、その質の硬軟を表はすには、輪廓の線に注意して描き別けるより、他に方法がないのである。從つて線は技巧上最も大切なものである。

例へば人物を描くにも、人體と衣服とは、その性質が違ふから線の描出も換へなければならぬ。皮膚も衣服も、同じ線で描出することは出來ない。更らに老人と青年との皮膚も、柔硬の度が違ふ以上、矢張り皮膚の線を換へねばならぬ。又風景を描いても、柔い草と硬い樹の幹が、同じ線であつてはいけない。物質が異る以上必ず線も注意して變へねばならぬ。

この線と云ふものは簡單に見えて、なか〳〵難しいものである。繪を學ぶには、この線に就いて可なりの年月を費すほどである、從つて簡單に諸君を導き得るものでない。諸君はよく物象描寫と云ふことを念頭に置いて、線の研究をされたい。

構圖とは組立を云ふので、靜物畫には水甕に手桶と柄杓と云つたように、關係の深いものを色々な位置に於いて描くことである。皿に果物、それにナイフを添へて描くにしても、組立如何によつて、繪が見劣りすることがある。

例へば机、書棚等角いものばかりを集めて描いても、線に變化がなくて單調である。それを角い机に、圓い火鉢、形の變つた炭取りをいゝ位置に置いて描けば變化があつて面白い。

靜物畫では自分の氣に入つた位置を勝手に作ることは出來るが、風景畫は、そうは行かない、であるから見取枠によつて變化のある最もよい場所を選ばねばならぬ。

風景畫等は空を廣く出した方が、繪に壯大な氣持もするし、それに雲の形や、その美彩には畫興がそゝられる。亦空を主にして描くならば、水平線を低く入れた方がよい。繪の主要な線には、他の大事な線を平行さしてはいけない。例へば山を描くにしても、そのアウトラインに平行した雲の線等は、避けた方がよい。

山でも、木でも自然物はすべて、生きてゐるものとして描かねばならぬ。山を畫面一面に、描くのは惡くはないが、空が低くては、繪として見苦るしい、亦一つの繪に同じものを、二つ描くと印象が弱くなるから、思ひ切つて只一つを描けば力强くなつて印象が深くなる。あまり自然に拘束されるといけない。諸君は活眼を開いて、自然は到る處で立派な構圖を提供してゐるから、

それを自分の好みに、それを撰べばよい。そして自分の個性を忘れてはいけない。

陰影

自然の物象に、厚さのないものはない。いくらかの厚さが必ずある。その厚さは、光線によつて陰影が生ずる、から物象の厚さを描寫するときは陰影を描寫しなければならぬ。

輪廓卽ち線のみを以つて、物象を描寫すれば、とかく物象の厚味を缺く場合がある。例へば、人物を描寫しても、その人物は厚さのない、紙に書いた切抜きのような人物が出來上る。山を描いても芝居の背景のやうに平板に見え、また岩を描いても丸味が現はれない。ゆえに人物も岩、山岳等も適當の厚さを有する陰影が現はれなければならぬ。

物象を我々が見て受けた感じ、卽ち丸く感じたものは丸く、角の感じたものは角く、厚いものは厚く、薄いものは薄く、それ〴〵感じたやうに表現せねばならぬ。陰影は洋畫としても大切であるからよく諸君は線と同じように充分に研究されたい。

スケッチ

スケッチとは、極く簡略な筆で、卽座に寫生するのがスケッチである。旅行をするにしても、その土地の情景を一寸スケッチするとなか〳〵面白い、繪の巧拙は別としても、それに依つて、昔の記憶を更に煥び起すことが出來て愉快である。

ペン畫のスケッチは、萬年筆では便利であるが、線が太く出て、不適當である。亦一々インキを持つて行くにも不便である。そこで、鉛筆とスケッチブックだけあればよい。最初は鉛筆で、

大體を下書して置いて、そして後でペンを持つて書き直せばよい。

このスケッチで描き直す處に妙味がある。ペン畫は、鉛筆畫よりも繪が明瞭であつて、筆に勢があつて氣持がよい。ペン畫であれば保存するにも、消々る恐れがなく、こゝがペン畫の特徴である。

スケッチするにも、僅かの時間を利用して描くのであるから、多少熟練が入る。早く描く練習が必要であるから、最初は簡單なものとして、インキ壺、果物等の靜物から、順次に家、樹木、山川の風景から動物なり、人物に進んだ方がよい。

背景

自然から感興を受けて、これを表現するには、主眼物を充分に描寫すれば、それで繪畫の目的は、達せられたのであるから、背景は要らないわけである。

然し自然の中に、單獨に存在し、全く孤立して生存し得るものはない。自然と離るべからざる關係を持つてゐる。人は大地を踏み、家に住ひ、鳥は空高く飛び、樹の上に留まる。同じ人の姿態を、描寫しても、外にある時と、家に居る時とは印象が違ふ、外を

歩む姿も、寂しい田舍道と賑かな都會の道を歩むのとは、その感情が異つてくる。ゆゑに、その物を一層明確に表現するには、そのものと關係のあるもの描いて、主眼の印象を明白にする必要がある。茲に背景の必要が生じてくる。

背景を寫すにしても、目に觸れたものを、悉く寫せと云ふのではない、若しそれ等を雜然と、悉く描寫したならば、畫面が混亂して印象が散漫になつて、却つて表現せんとする感情が弱くなる。背景は主眼でない、寫さんとする物を助けるのであつて、寫さんとするその物でない。從なものである。如何なる場合にも、主眼より背景に、細密な觀察を下して仔細に描寫することはいけない。若し背景を主眼よりも細く描寫したならば、それは背景

が主眼なのである。例へば人物を輪廓のみ描寫して背景に森を精細に寫したときは、主眼は森にあつて人物は從になる。背景は主眼を助けるものであると思へばよい。

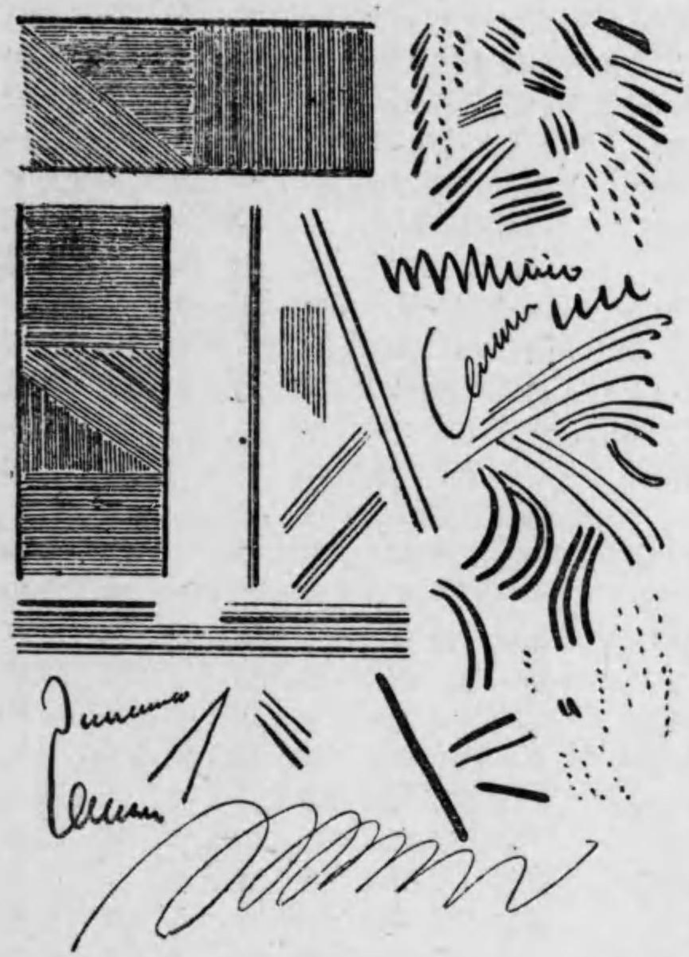
ゆゑに、背景は細密に描寫する必要はない、何かしら背景の中で、強く印象されたものを表現して、他の細部は省略すればよい。寒さに震へながら、道を歩む人物を寫生した時、寒風に動く枯れた街路樹の一本を、寫せば寒さの印象は加はる、試驗勉强をする學生を寫生するにも、壁に貼られた時間表を描寫すれば、その學生に對する印象は明白になる。

一本の樹にしても、一枚の紙にしても、背景として充分に目的は達せられるのであるから、よく諸君は忘れずに觀察して寫生し、それに依つて、季節、時間場所等を、明白に表現して、主眼の印象を深めなければならぬ。

ペンの運び方

ペンの運び方は。最初ペンを手にする前に、手を充分美麗にして置かないと、折角苦心して描き上げても、手に油やインキの浸みがついて居ると、紙面を汚す恐れがあるから、よく注意する必要がある。

平行、直線、曲線、斜線等はペン畫としての基礎であるから、殊に



充分練習が必要である。

平行直線は、定規等を使はずに、長短自在に線を引き得るやうに練習が必要である。白紙の儘では自由に引けるが、一定の處から他へ引くと、兎角く、具合よく線が引けないものである。一本の直線を引くにも、眞直に引けるが、平行線になると、多少線に狂ひが生じて間隔が一致しないことになる。

曲線、例へば刀劍、火鉢の如き曲線したものを描くにも、刀身を表はすには曲線が必要である。曲線は斜上へ勢よく引くのである。縦線、横線も矢張り畫面を回轉して左から右の方へ引く、その方法は自然で、引き易くもあり、亦勢のある線が引ける。

複雑したものを描くには、斜、縦、横、逆斜線等の種々の線が入る

から、自由自在に引き得るやう練習することが肝要である。

人物畫

人體

人物を寫生し、その人物より受けた印象を、描寫するには、その人物の體軀が、如何なる狀態にあるか、如何に屈曲してゐるかを、その體軀の姿態を研究せねばならぬ。

人間の體軀の中、外に露はれるのは、頭と手足の先きである。他は衣服に蔽ひ隱されてある。その姿態を知るには、男子の洋服、大工左官の仕事着の如く、裸體を基礎とした、形の衣服等は別として、女子の洋服なら、スカートのために脚部が解り難い。また日本服のときは、中の體軀の姿態が一層解り難いのである。

衣服の中に隱れたる體軀の姿態を知るには、それは衣服の皺、卽ち衣紋によつてのみ知り得られるのである。衣紋によつて中の體軀の形が定まるのではなくて、中の體軀の姿態の形が定まるのである。いくら衣紋を正確に巧妙に描寫したところで、肝心の體軀を精細に調べたとき、畸形に見えたり、逆に屈曲してゐたりしては、繪畫としての價値はないが、體軀さへ正しい姿態

をなして存在するやうにさへ、描寫すれば衣紋は嘘の形でも省略してもよい。

從つて人物畫の基礎は、人間體軀の研究は、卽ち裸體の研究である。精細に裸體の研究をすれば、專門家になるわけでない諸君には繁煩である。人物畫の基礎は、裸體であるから、衣服や衣紋には抱泥せずに、常に人物の體軀の姿態は如何なるかに注意されたい。

人體の根底をなすものは骨である。從つて人體の姿態は骨格の姿態を見なければならぬ。ゆゑに人物を寫生せんとするには、外形を描く前に、先づ第一に、その人物の骨格は如何に屈折し、如何なる姿態にあるかを觀察して、手、足、胴を五本の線となして、簡單なる線を引いて、骨格の姿態を正確に描き、次ぎにその骨格に肉を付けて、體軀となし、終りにその體軀に着物を着せるやうに描寫すれば正確にその人物を寫生し、衣紋も正確に描寫し得られるのである。そして衣紋は、その體軀の重要なものを描寫して、他は簡單にしてもよい。

顏

人相と云ふものは存在するが、體相と云ふものはない。美醜と云ふのは、顏に對する形容詞であつて、姿に對する形容詞ではない。人を記憶し、最も印象に殘るものは、顏であることは、小兒

が人體を描くに、顔ばかりを大きく描くのによつても、容易く知られることである。

從つて人物畫も、顔が主要部である。例へば、上向きの顔に、下を向いた鼻を描いたり。下向きの顔に、上を向いたときの眼を描いたりしてはいけない。必ず實物を見て、仔細に研究して、嘘は絶體に描寫しないやうに注意しなければならぬ。

男と女

體軀が男性と女性とで、その間に差異のあるのは性的關係によるものである。性慾のない子供と、性慾の稀薄になつた老人とは、その間に甚だしい相違はない。基礎としての程度なら、その體軀に相違を付けなくともよい。

壯年に於ては、男の肩の幅は、腰の幅よりも廣い。女の肩の幅が臀部の幅よりも狹い。ゆえに、卵形を描いて、それを逆立てたのが男の胴體である。亦直立させたのが女の胴體となるわけであるから、それに頭と手足をつければよい。

男性の體軀には、甚だしい特徴はないから、肥つた人とか、痩せた人とか云ふ場合を除いて、普通に描けばよいのであるが、女性にあつては、體軀の特徴は前面から見れば乳であり、背面から見れば臀部である。これを注意して描けば、細部を省略しても、充分女性に見える。

體軀と頭部とを、比例すれば、男性よりも、女性の顔は、割合に大きなものである。頭髪は先づ頭の線を描き、その上に島田髷なり、耳隠しなりを描けばよい。

衣服の帶は、男性と比較して、女性は上に締めるものである。處女などは、殊に著しい、俗に胸高と稱する位で、帶と脚のつけ根の間は、可成りの距離と餘裕とがあるから、下腹部と臀部のふくらみが、明瞭に見える。然し次第に年を取るに從つて、帶も下に下つて、下腹部と臀部のふくらみも少くなり、老年に至つては、兩性殆んど同樣になる。

子供

子供の體軀は、成熟した壯年と比較すれば、第一肢體は比較して、頭が大きい、手足を胴體と比較すれば、手足は細くて小さく、そして短い、胴體は太てく大きく、そして長いのである。

頭の中でも、顔の部分と、頭の部分と、比較すれば、頭の部分は多く大きい。顔の部分は少くて小さい。眼は顔の中央より下にある。即ち顱頂より眼に至る距離は、眼より顎に至る距離よりも長い、そして顔の横幅も、顔の長さに等しいのである。

顔の諸道具も、すべて小さくて、正しい釣整が取れない。眼と

眼との距離も必ず眼の長さの一倍半か二倍位も長い。そして首が細く短かく、手の指も太くて短い。

子供の體軀は、壯年の體軀と比較して、不完全な釣整より成立つた體軀なのである。諸君が子供を見て、無邪氣であり可愛ひく感じるのも、多分に存在するこの不合理に過ぎないのである。子供の體軀が成熟した壯年の體軀の如く、完全した釣整のある體軀であれば、それに如何に小さくとも、エスキモー土人の如く、決して無邪氣可愛いく感じないであろう、子供の無邪氣さを表はすには、例へば眼と眼の距離を廣くすれば、するほど可愛さは加るのである。この不合理が成年になるに、從つて消失せるのである。皮膚は脂肪に富んで　く、骨は表面に表はれないから、顏も手足も柔かな曲線で描くのである。特徴としては着物は短くて、帶は上方に締めて居る。

老人

老人の體軀は、性慾の稀薄となつた人は、男性女性の差は極めて少ない。老人の特徴としては、顏面の皺であつて額の皮膚のたるみによつて、横の皺が生ずる。眼瞼のたるみによつて、眼の上下に眼窩の皺が生じ、口のたるみによつて、鼻から口の兩側に、鼻唇線の皺が生じて、頰骨が突起して、頰肉が落ちることによつて、頰の縱の皺等を仔細に觀察して描寫すればよい。

手足の肉は落ちて、細くて長い。指も細くて長い。この肉が落ちて、骨の表はれる狀態を、正確に知るには解剖上の知識は必要であるが、然し諸君の手足を見て、肉の部分より肉を落して骨の表はれたる部分を、更らに表はすと云ふやうに、研究すれば正確に表はし得ることである。

老人の皮膚は、硬い感じをするものであるから、硬い、弱い線で表はさねばならぬ。

表　情

表情とは、顏面が筋肉と身體の動作によつて、時により折に觸れて、昂奮する感情を表はす運動である。この表情には、永續的な表情と、刹那的表情とがある。

永續的表情とは、靜止し、固定した顏、その地の表情である。

刹那的表情とは、顏面の筋肉の運動であるから、正確に知るには解剖學の研究をせねばならぬが。それは隨分厄介でもあり難かしくもある。そこで簡單に表情の運動を說く。

靜止した顏が、表情によつて運動した顏と比較して、その表情運動のために如何なる不合理が起るか、例へば笑ひ顏が、靜止した顏と比較すれば、口の兩端卽ち口角が上外方に登り、口が開いて上の齒が現はれて、眼尻が下り、眼が細くなつてその周圍に皺

が生じて頰の鼻に寄つた部分に膨れ上り鼻が短かくなる。

表情運動を最も簡單に見るには、眉、眼、口、鼻を四本の線として見て、四線が水平で直線のときは靜止した時で、鼻を中央に高く、兩端が低く、下つた時は、眉、眼が離れてへの字口がへの字の狀態をなした時は悲哀、苦痛である。中央が低く、兩端が高く上つた時、眉、眼が離れて逆のへの字、口が逆のへの字の狀態をなした時は、愉快嬉笑である。

表情運動には、一般、喜怒哀樂と云ふが、樂に對して苦もあり、驚愕、考慮と加へて人間の七情と云つたにしても、愛慕、憎惡、畏懼、威赫、嫉妬、侮蔑等を擧げると數が多い、笑にしても微笑、哄笑、失笑、冷笑、嘲笑と幾種類もある。顏面の運動を寫生するには可なりの困難がある。ゆゑに諸君は鏡に自分の顏を寫して、種々の表情をすれば簡單に表情の研究が出來る。

人體の權衡

人物面を描くには、人體の推衡から研究しなければならぬ。人體も專門に研究するには解剖學を學ぶ必要はあるが、風俗、人物のスケッチするにはそれ程の必要はない。然し簡單なる人體の權衡を知つて置く必要がある。

體軀は日本人と外國人とは、多少の差異がある。亦男と女と

は、男は腰の幅よりも肩の幅が廣く、女は反對に腰の幅は肩の幅よりも廣い。手足も男が女よりも二仙米突ほど長い、女は足の踵より指先までの長さと同じ位である。人體の長短は、主に下肢にあるので、頭の頂から、軀幹の下端までの長さは、大抵、の人は皆同じで、腿と脚との長さに於いて、その差が大いのである。

人體の割合は、頭を以て全身を測り、全身の長さは八つに分けることが出來る。

頭の頂から腮の尖までの長さ　一

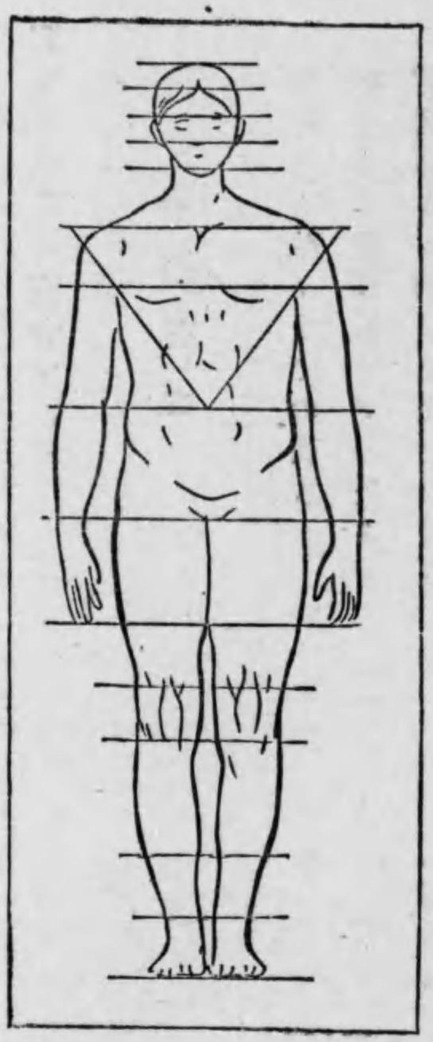
腮の尖から胸骨上端までの長さ　半

胸骨上端よりその下端までの長さ　半

胸骨下端より臍の上までの長さ　一

臍の上から股の間までの長さ　一

臍の間より股の中央までの長さ　一



股の中央より股の下端までの長さ　一

人體の權衡

膝の下より踝骨までの長さ　一、半
踝骨より踵までの長さ　半
以下で全身の割合である。

臂の長さ

肩頭より腋下までの長さ　半
腋下より臂關節までの長さ　一
臂關節より腕屈節までの長さ　一、四分一
腕屈節より中指頭までの長さ　頭の四分三
腕は體側にかゝり指を開くときは、指端股の中央に達し、腕を左右に伸べ、體と正角をなす位置に至るときは、右の中指端より左の中指端に至る横徑は、全身の長さと等しいのである。

頸の横徑は　半
頸筋の附着した部分の右より左の間を　一、半
肩の幅は二とし、この幅は臍と等しく　一、半
腋の下にて胸部の幅を　一、四分一
胴の中部の幅は　頭の四分三
股の上際の幅は　半
膝の上端の幅は　半
膝の下端は　頭の八分五
脛の幅は

踝骨上際の部は　頭の四分一

以上で臂の長さの割合である。

背後の幅

耳の上部にて頸の横徑	四分一
頸	二分一
肩の頸筋起始點の横徑	一、半
肩	二
胴	一、四分一
髖骨の幅	一、半
股の中央	四分三
膝の上際	半
膝の下際	半
踝骨の上部	頭の四分一

以上で背後の幅の割合である。

正面顔貌

正面顔貌の割合は、先づ顔を卵形に見做し、長徑を引き之れを切半して四つに分けて、次ぎのやうに各々の位置を定める。

頭の頂より額の髪際までを

髪際より鼻の根元までを

鼻の根元より鼻の端まで

鼻の端より腮の下端まで

四部に二つに分けて下唇の下際を定めて、その上部を三分して、下唇の下際より下へ上唇の厚さを移し、腮の起始とする。耳は丈鼻と等しく、之れと平行して居る耳の上部は、頭の最も廣い部なのである。この幅は頭の四分の三にして顔面の縱徑と等しい。またこの幅の五分の一は大凡そ目の幅である。兩眼の間は目の幅と同じである。

長徑に平行して鼻の兩側に沿ひて目の內隅より垂直線を引けば是れによつて鼻翼の幅を定めることが出來る。兩鼻孔は

目の幅と等しく、口の幅は目より稍長く。正面の眼を三つに分け、その中部を瞳子の位置とす、側面より見た眼も瞳子の幅をその三分の一とすればよい。耳の幅はその丈と等しい、又丈を三つに分けて中部を耳孔の位置と定め、正面の鼻を三つに分け、部中を鼻の中央として左右を鼻翼とする、口は四つに分けて、中央を唇の中心として左右を上下の唇の最も灣曲ける部とする。

側面顔貌

先づ頭の丈に應じて縱線を引いて、その兩端より正角な二つの平線を引き、二つの線を頭頂と腮の端として、右の縱線を四つ

に分けて左の位置を定める。

頭より額の髪際まで

髪より鼻の根元まで

鼻の根元より鼻の端まで

鼻の端より腮の端まで

四部を又二つに分けて下唇の下際を定めこの二分の上際を更に三分して下段を下唇の厚さとする、中段を上唇の厚さとして上段を鼻の間と定める。右の割合で縦線の中に定め、次にその兩端に於ける二平線の間に卵形を描いてその短徑を引き、二平線と平行せしめて、その一端を鼻の根元の稍上方へ觸れしむ、この卵形はよく注意して描く、上唇の膨脹せる點より口の分裂部の前面を過ぎて腮の起始點に觸れ、下つて腮と咽喉の角隅を定め、上つて耳の中心を經過するやうに描くのである。

口の分裂部と相對せる右の縦線の一點より横に平線を引き卵形に達せしめ、その附着する點を上唇の一端とする、鼻は縦線より外方へ突起する、その突起の割合は鼻の下端より口の分裂部にまでの間と同じにする、縦線は鼻を二分するから鼻翼は内方の半となる、又縦線に平行する他の一線を鼻翼の内端より引き下げ、下唇の下部にて卵形の弧線と互切せしめ、以て腮の起始點を定め、口の幅は鼻の外方へ突起する丈と等しい、且つ之れと平行する、耳の丈は鼻の丈と等しい、その位置は卵形の孤線が耳の中心を過ぎ且つ鼻と平行するから自ら知ることが出來るで

あらう、縦線との距離は二鼻となるのである、頭の頂より耳の距離は鼻の根元より頭の頂と等しいものである。頭の頂の最高部は耳の上方にある、額の中部より腮の中部へ向ひ斜線を引けば、眼の位置を定める點と、眉毛の凸際部を定むべき點を得るのである。

耳の後方の中部より額の前面の中部に向ひ、斜めに直線を引けば等邊三角形を得る、而して角の尖點は腮の尖を定めるやうになる。

靜物畫

靜物畫として如何なるものが、畫として適當であるか、凡そ物體として畫にならぬものはないが、目的の如何によつて適不適がある。

初歩としては如何なる物を選べばよいか、最初はなるべく、形の簡單な直線形狀の物、例へば、書物、机、書棚、火鉢等がよい。そして熟練したならば彎曲形狀の果物、花瓶花類等を研究して行けば靜物畫は容易く描くことが出來る。

描くにしても初めは風雅なものよりか、日常品も極めて簡單なる直線形狀のものを選んだ方がよい。位置の定め方は、寫生する上に最も必要なことである。折角適當な品物を選んでも、位置の定め方一つで失敗することがある。ゆゑに寫生する前に先づ、その物を如何なる位置に定めたならば、畫として適するであらうかを考へる必要がある。言葉を換へて云へば、平凡な物を如何にして、趣きのあるものにするかを研究することである。一般に定則として。寫生物の位置を其の物の自然に適合するように定めること。＝寫生物の性質を最も完全に表はすに適したる位置となすこと。この方法に則つて位置を定めたなら、如何なる平凡な物も趣きある畫が出來る。これに反して平面的に偏し。或は立體的に偏したりすると、趣きのない畫を作る原因となるのである。

筆者と寫生物との距離は、品物の性質によつて定まるのであるが、普通には書物や花瓶や果物等を描くときは、三四尺離れることが必要である。あまり接近して描寫すると、細部にのみ注意して、大體の形や陰の調子がわからなくなるからである。また寫生が單數と複數とによつても、位置の定め方が異つてくる。單數のときは寫生物の不自然にならぬやうにして、その物の性質を表はすことである。複數のときは面倒でもあるが、また趣味も多い。

單數の寫生として、例へばこゝにペンとインキ壺を寫生する

として。インキ壺が主位でペンが客位になるから、インキ壺の位置を自然的に定めてその性質を表はすやうにして、客位となるペンはインキ壺の添物として調和を保つ必要上、後方に描くのである。その心持で位置を定めればよい。

これに反して、ペンをインキ壺の前に置いて寫生したとする。この場合は前に說いた方則に異つてゐるから、こんな位置は避けた方がよい。單數のときは、主客によつて位置を定めればよいが、復數になると、主從客に分けなければならぬ。

朝顏と金魚鉢に、蟹を添へて寫生するとき、筆者に金魚鉢を寫生せんとする動機を與へたと假定する。それに蟹を添へて金魚鉢の調和を保つために、朝顏を加へて描くことにした。その配置は如何すればよいか、この場合は金魚鉢は主位となり、朝顏は從になり、蟹は客となるのである。同一の物を多數を描くときは各々位置を變へて、描くことが必要である。同一の形で何個も配置してはならぬ。五個の數を描くと假定する。そのときは二つを主として次ぎに一つを客として殘る二つを從と定めて配置すれば趣きがあることになる。であるから諸君はこの配置法に從つて研究されんことを望む。

風景畫を描くには、如何なる場所が適當であるか、それ〳〵繪によつて、適當な位置がある。これを無視すると、折角描き上げても、無駄骨になることが多い。

油繪や水彩畫等は比較的色彩の變化が多い、處を選ぶ必要はあるが、ペン畫には斯樣な點よりも陰影の濃淡や場所が面白ければよい。

例へば小さき橋、小川の流、田舍家、森等を注意したなら、面白い場所が得られる、ところが兎角く初學者は。廣漠なる處を好んで描くといふ傾向がある、これ等は、失敗の原因となることが多い。

最初はなるべく、風景畫の一部分を成す、木とか草とか農家の一部なり、山とか川等が最も適當である。こんな處は何處へ行つても容易く見出すことが出來る。選擇に時間も要せず、これらの場所に練習してから、上達すれば、前景、中景、遠景の完備した景、例へば前景に草、中景に川、遠景に森等、亦は前景に漁舟中景に海、遠景に島等の場所を選んで研究すればよい。

枯樹の林、小川を描いて冬の淋しさを表はしたり、日向の緣側で、可愛い小猫が眠つてゐる傍らに、鉢庭の梅が二三輪綻びを見せてゐる處をスケッチしたり、亦小春日和の樹の蔭で子供の遊ぶ樣をスケッチして、初夏の感じを表はすのも、熟練すれば自由に描寫することが出來る。

寫眞を撮すような題材を一つの畫面に入れるよりも、その一部になか〳〵風趣のある好き材料がある。

風景畫は靜物畫と違つて變化が多い、從つて位置の取り方も面倒になる。

廣き野原、海岸、湖水等は普通は横に位置を取ればよい。主眼物と地平線の關係で、縱の位置にすることもある。要するに地平線を定める事は、位置を取る上に最も必要なことである。

例へば效外の廣き野道を描くとする、その時に空を主眼としたとき、夕暮の變化ある空等を描くには、地平線を畫面の四分の一位に定めてなるべく。地上を表はさぬ方がよい。また春や夏の草木の繁れる點を、主眼としたときには、地平線を反對に三分の一か四分の一位に定めて、空を少なくして描いた方がよい。このように何づれかへ地平線を定めればよいが、畫面の中央に地平線を定めると主眼物を表はすことにも、また趣のことにも面白くないからなるべく避けたがよい。

風景畫にも、矢張り靜物畫と同じように主、客のあることを忘れてはならぬ。靜物畫のように自分で勝手に位置を作つたりすることは出來ないから、自分の眼に映じたとき、最も深い印象を與へられる點を、主眼とすればよい。靜物畫に於いても、主位にあるものを中心に置かないと同じように、風景畫にも主眼物の位置を畫面の中心に置かないで、その上、下、右、左等へよせるようにすればよい。廣漠たる原野に立つたとき、諸君は何れまで畫面に入れてよいかに迷ふであろう、そして主眼物の位置も定め難くなつてしまふことがあろう、このときには前に說いたよ

うに、見取枠によつて目的とする方向を、透して見たなれば、どんな復雜した處も容易く畫面に見出すことが出來る。

描　法

描き方に就いて、第一に、心得て置くことは、形は勿論陰影の濃淡に注意して、これを大體に描いて微細なる點は省略することである。

靜物畫を描くように、一々隅々まで注意して描く必要はないから、實景に臨んだときは、先づ位置を定め、そして鉛筆にて大體を下書して、畫面に縦横の線を描いて、見取枠を透して實景を見て、畫面の線と比較して、形を見れば容易く出來る。このときは實景の大體を簡單に、直線で描いてから、之を標準にして緻密にすればよい、形が出來上つたなら、自分で見える程度にして、他はゴムで消して、愈々仕上げに着手するのである。

仕上げるには、先づ鉛筆にて影は強く、日向は強い線で描いて、それに陰影を施せばよい、下書するには地平線の位置を定めた上、何づれから描いても自由であるが、仕上げるときは、主眼物より描き初めた方がよい、普通は遠景、＝中景、中景＝近景と云ふような順序で描くのである。大體の順序としては、先づこんなものであるが、熟達すれば形式に拘泥せぬ方がよい。

樹木

樹木を描くことは、初學者には少しく困難である。幹は圓く出來ても、枝が四方へ廣がつて、それに葉が付いて擴がつたものなど、その樣がなか〳〵描きにくい。ゆゑに一本の立樹から、深く研究を積まねばならぬ。始めは葉の落ちた枯樹から樹の幹枝葉と云ふ順序に練習して、そして相當に上達したならば、周圍の景を入れた方がよい。

樹でも草でも、その性質とを知ることが肝要である。松、杉、等各特色があつて、これを描いたならば、直ちにそれと見えるようでなければならぬ。例へば梅を描いて、櫻に見えるようではいけない。ゆゑに各特色のあるものは枝振り、幹の皺紋、葉の形等を注意深く觀察して描くがよい。

最初は種々なる幹の皺紋を表はすやうに勉め、そして餘り葉の茂つてゐない、枝の割合に見える樹を描くのだ。その上に葉の形を描くことが順序である。葉の形は割合に容易く表はれるものである。八方に廣げた枝を表はすには、手前と向の方とを、それ〳〵調子を付けねば厚味は表はれない。さうでないと煙草の葉を見るやうな扁平なものが出來る。

それから幹と土地の關係も必要である。之に注意しないと樹が根のない棒切れのように見えることがある。

ペン畫は、樹を繪具で色別することは出來ないから、枝葉振りで、區別しなければならぬ。輪廓の取り方も、枝葉のペンの使ひ方も光線の度合に止まるのである。樹の大體の調子を取るには輪廓と光線の度合とによつて、簡單に取つて、細部には拘泥しない方がよい。又天候の加減にも關係するが、曇天のときは、濃淡は左程異らないが、晴天のときは陰の處は黑くして、太陽の光線の當る處は白くしなければならぬ。

草

草は季節によつて色々の種類に變化があつて、色彩によつて示すことは出來るが、ペン畫はそれは困難である。よつて季節により見分けるようにしたがよい。

草は細いだけに簡單に表はせばよい。近い處にあるものは小さき葉や細莖まで細密に描かねばならぬが、少し隔たると陰日向の大體に注意が入る。短い草原で日向と影とを、描き分けるのは何でもないやうであるが、描いて見ると、中々表はれぬものである。余り明瞭に區別すると心持の惡るいものが出來上る。

ゆゑに草は細かいからと云つてあまり細微に描き過ぎると、共感じがいぢけて面白みのないものが、出來るからその大體を捉へて、草の生へた方向にペンを使へばよい。

花

花の中には、樹に咲くのと草に付くのとある。大概は美麗な色彩を持ち、その美を恣まゝにしてゐる。ペン畫は色彩がないと雖も、その形や調子によつて色彩以上に見ることが出來る。

靜物畫として鉢庭に咲ける一二輪の花や、室内に飾られる花瓶の花等は花その物が主題であるから、性格を究めて一々精細に形體、光線の度合等を描かねばならぬ。

庭園に咲き亂れたる花等は一々その花を描く必要はない、特徴のある花及葉を三四輪正確に描寫して、他は幾分その特徴を

表はす程度に、草や葉の生へてゐる。方向にペンを使へばよい。そして明暗の度合を區別しなければならぬ。

又樹蔭に咲いた白芙容等を描くにも、白いものであると云ふ事が考へに殘つてゐると、花を最白く描くために、調子外れの繪が出來る。この白いものの蔭の色は六ヶ敷いもので、稍もすると汚くなつて其物は白いものであると云ふ、感じは頓となくなる。殊に雪景等は此れで苦しむものだ。牡丹とか芍藥とかの類は、花片が大きいから、其一輪の中にも尙ほ日向や濃淡を付けねばならぬ。花は色と云ひ日向と蔭との區別が、頗る六ヶ敷ものである。ゆゑに其感じを表はすように、練習することに勉めねばならぬ。

山　嶽

山にも、樹に敝はれた山、禿山雪を戴くもの雨中の山、或は斷崖等があつて種々變化ある色を呈する。地質によつて夕陽を受けて、麗朗たる紫玉の如く美麗な色を呈するのと、黑ずんだ色の山等がある。前者は花崗岩質の山に見る現象である。遠山は凹凸卽ち谷間や峰々の模樣が見えぬから、それに影と日向も區別が出來ぬから太陽の所在によつて濃淡の度合を表せばよい。

山の頂界線は風景全體に大きな關係がある。この線の如何は畫を死活せしむることがある。から寫生するに當つては細密の注意が必要である。ペン畫は遠景の山等は線で表はすが重なつた山は遠近の度合を表はすために、濃淡を表はさなければならぬ。山の凸凹は峻しいか、緩慢なるかを表はすものであるから、これ等の變化を充分に注意せねばならぬ。

描き方は遠景の山より濃淡の度を定め、そして頂界線で次第にペンの線を細密にして、近景に及ぶのである。

河（流）

水は透明なものである。日光、空、雲等の變化模樣に從つて絶えず變化する。又深くなると空氣の如く蒼味を帶ぶ。又風等

のために波動を起し、或は溝川の如く流れるに至つては、其波絞頗る複雜で中々描くに困難である。水面の平滑を描くにもその奥行を表はすには、土地等より一層困難なものである。水は凡そ三つの調子になつてゐる。遠岸に接した所が明るいときは、それより手前は少し暗くなるといふ順序である。又向岸が暗いときは此れと反對である。狹い川や水溜りは明暗二調子でよい。水は空や日光等の反對の色をなしてゐる。

最初は大體の輪廓を鉛筆に取つて、そして除々に陰を付ければよい。波や泡は如何に陰があつても、樹、草岩石等より薄いのであるから注意せねばならぬ。ペンは流れる水の方向に從つて使へばよい。

海

海も空の變化によつて變るのは勿論である。川や池などのように、只空の色だけでなく、大低深いのであるから色も濃厚である。それが波の起伏によつて顯はれ、又日光の映射の色、波と波との反射などあつて、川の水とは少しく趣きを異にしてゐる。風の方向にも關係する。

波にも春の海の如く靜かなのもあれば、狂瀾怒濤の波もある波を凝視すると、一定の形を繰返すリズムが發見する。

靜かな波は水に投影が認められる。水面にさゝやかなる變

化があるから、幾分曖昧にされた、投影を巧く描かねばならぬ。泡沫は點に近い短線で描くのである。船が進行するときは浪に不規則な渦卷と泡沫を周圍に殘すことも注意せねばならぬ。

船

船にも小川に浮べる船も、大川に浮ぶ傳馬船、外國に行く巨船等も船である。

一々その形體を解剖し研究することは、繁鎖であるから、船に對する智識は諸君の研究に俟つて、船を描くに必要なことを說く。

船も潮水の如き渓流のときと、巨濤浪卷く大海とは趣きが異つてくる。そして形體は精細に描かねばならぬ。總て移動する物は、その移動物の位置を定めて先きに描き、そして周圍の景は後に描くのである。可成く左の隅から描くのが適當である。船は多くの諸線が複雜に使用されてあるから、細密なる輪廓を取らねばならぬ。

空　雲

空は、同一の場所で同じ時刻でも、空の方面によつて種々違つて居る。午前と午後と又春夏秋冬の四季でも悉く違つてゐる。

かくの如く、變化極まりなきものであるから、其時と場所とにより、忠實に諸君の見た處を研究するより外はない。

雲も非常に六ヶ敷いものであるが、研究するに從つて、その變化の妙が分つて來るので、自然愉快を增すやうになる。雲にも種々の名稱があつて、鰯雲、鱗雲とか、或は阪東太郎、金床雲、夏に現はる夕立雲、雲の峰等澤山の名稱がある。かくの如きは、形態變化より來た名稱である。朝夕の雲は、空の色の變化や太陽の光線とによつて、種々な色を呈するもので、空の色の變化あるも尙ほ甚だしく、千變萬化するものであつて、專門家と雖も、この雲をそれらしく、寫すことは困難である。その代りに雲の寫生で面白い畫が出來る。浮動常なきこととて正確に描くことは、困難であるから大體の形を鉛筆にて取り、ペンは細き線が平行して居ては、單調になるから。線に注意して互に些少の角度を以て曲折して、落付きを示さなければならぬ。

動物畫

動物畫を描くには、動物の形體を知る必要がある。諸君は、日常眼に有り觸れて居る猫、犬等を描くには。形體も大體易つて居るだらうが、動物にも色々の種類があり、又毛の生へ具合も、犬獅子、熊等も異つてゐる。略想像がつかなければ、ペンを如何う

使つてよいか分らない。ゆえに動物の知識も必要になる。然し先輩の描いた動物畫や寫眞等があれば、ペン畫は出來ると云つてもよい。毛の種類も馬の背中のような短かい毛、熊のような太くて長い毛、羊の綿のような毛、臘胴臍、獺虎等種々異つた毛がある。

それ等を殊更に區別して描く必要はない。筆者自身はその概念で描けばよい。

馬

動物畫として、馬は實物を見なくとも想像がついて居るから、畫題として選んだのである。又ペンの使ひ方も各部分に就いて說けば、他の動物を描くにも、略ぼ使ひ方が容易くわかる。

馬によつて多少の相違はあるが、普通は頭の項から口の先きまでが、三つの割合になる。

口先より鼻の中央までの間は、顏の全長の八分の一位になつてゐる。顏の中で一番廣い部分は、眼と眼との間である。その割合は頭の長さの七分の三位に當つてゐる。鼻の邊の幅は、顏の長さの四分の一、耳の外側から外側まで、卽ち額の上部の幅は、顏の長さの七分の二位である。大體に就て云つて見ると、馬の顏は、人間の顏の鼻を延ばして、口と鼻との間を接近させたようなものであつて、顎かなくなつて口唇が飛び出たものと、略ぼ相

像すれば間違はない。その積りでペンを使へば、馬の顏としては大した誤りはない。

ペンは粗雜に描くときは、顏の縱に使ふのであつて、丁寧に描くには、ペンを横に使ふ方がよい。鼻峰の兩側は人間の鼻のように、急に窪んで居るようになつてゐるから、その積りでペンを横に使ふのがよい。圓味のある處は、稍線を彎曲せしめて、圓味を表はすように描かねばならぬ。兩眼の下の邊は、骨格の凹凸があるから、それを一寸表はすがよい。鼻の穴口の先き上唇はペンを縱に使つても、横に使つてもよい。兩方の鼻は圓味を表はすため、彎曲した短い線を以て描くのである。頰の處は線を彎曲せしめて、顎の下の處に集るように描くがよい。さうでないと、顎の下に線の端して置くと、顎に角があるように見えるからである。亦首の邊を描くには、首の長筒のようなものに對しては、彎曲した横線を以つて描くのである。稍凹んだ處は線を波狀にして、太くして凹みを表はすのである。胴も同じことで、圓味を表はすには馬の腹卷のようなようにペンを走らせばよい。

足の描き方は、筋肉と骨格の恰好を表はさねばならぬ。筋肉と關節の處は、いちいちペンを使ひ分けねばならぬ。簡略に描くときは、凹んで居る處は、太い線で描くのであつて、ペンの使ひ分けはしなくてもよい。爪はペンを縱に使ふと硬く見えてよい。後足の上の關節の處の筋は、人間の踵の上の筋に相當する

ものである。耳は縦にペンを使つても、横に使つても大差はない。

白馬のときは、只だ凹んだ處や、陰の處にペンを使へばよい。そして光線の當つた處は、殆んどペンを使はないようにするのである。ペン畫ばかりでなく總て繪は白いものを描く場合は至つて簡單なものである。

他の動物を描くにも、只だ形體が異つて居るだけであつて、ペンの使ひ方は馬の場合を參考にして描けば出來る。亦毛の長いものには、輪廓は線で表はしてはならぬ。そのときは先の長いことを表はすために、毛の表はして描くのである。熊のような荒い毛のときは、毛を荒く表はし。羊の毛のようなとき線はを短かく使つて、雲を描くような氣持で描くのである。膃肭臍や獺虎の毛は、比較的線を細目にして、馬を描いた時のように、ペンを使ふのである。

羽毛

鳥類を描くには、是非羽毛を描かねばならぬ。鳥類の種類や形は別として、羽の描き方を會得したならば、何鳥でも描けることゝ思ふから、羽毛の描き方を說く。

鳥の羽は廣いものである。羽の心を描くのである。翼などを描くときは、皆羽が重なつてゐるから心を描く必要はない。

細かい線を以て表すか、或は重りの淺いものには心があるものと見て、斜に線を引くのである。

亦簡單に描くときは、線のみによつて表はして、羽の形等は表はさなくてもよい。

柔い羽毛のときは、羊の毛の描き方の要領で描くのである。

鳥類の羽毛の説明として、これで充分である。種々の鳥類の描き方にも變りはないから、他の鳥類は實物か、亦は寫眞等を參考にして練習するがよい。

應用ペン畫

應用ペン畫として寫眞より取り得る方法がある。一寸寫眞其の儘をペン畫にすると思ふであろうが、寫眞より取るペン畫と言ふのは一部はそれもあるが、寫眞を應用するペン畫である。水彩、油繪等はペン畫と違つて、色彩を要するから寫眞のみでは色彩の調子が解らないから、實物を見る必要がある。ペン畫は寫眞があれば實物を見なくても出來る。

寫眞應用ペン畫を學ぶには、最初寫眞を其の儘ペン畫に寫す

事を練習するのが、最も順を追つた方法である。これによつて陰はどういふようにペンを使ふか、着物の皺をどう使へばよいか、寫眞の種類によつて、ペンをどう云ふように使ふか、凡て寫眞の細かい部分に及んで居る。陰を研究して見ねばならぬ。亦寫眞よりペン畫に寫すには成可く簡單にして、而かも其要點を失はぬように、描かねばならぬ。人が和服のときに正面から見れば、どういふ恰好であるか、後から見た人の寫眞は、どんな恰好であるかを見覺える必要がある。常にこの位の注意を以て描く習慣をつけると、寫眞がなくても和服の人の正面、背後、側面等の恰好も見當がつくからスケッチ等する場合にも、速やかに描ける。スケッチばかりでなく、繪を描く上から進歩が早いのである。寫眞を見て其儘描くにも、寫眞の顔に似せて描くのもよい事ではあるが、顔として釣合が成立つて居れば、強いて似せる必要はない。肖像畫はこの限りではないが、普通の畫であれば顔を習ふ點より見ると、似せて描うをが似せまいが、別である。

寫眞應用のペン畫は、寫眞の内の一人或は一部分を取つて、他の寫眞の一部分と結び付けて、自分の技倆によつて、描き添へるのである。例へば人の腕の具合を見ようとするに、寫眞の一部分である人の腕を見て、自分の創作した繪に補ふことも出來る。足の曲折の具合を見ようとして、洋服なればズボンの皺の寄り方を見たり、足先きの方を見たりして、自分の思ふ恰好の繪を作ることも出來る。人の頭も、見方によつて種々の形になるので

あるから、自分の思ふ恰好があつたなら、それを參考にして思ふ人物を仕上るがよい。この事は一種の技術であるから上達すると、立派な繪が描けるのである。自分で創作したものに光線、釣合、恰好等に誤りがあるときは、その弊を防ぐために寫眞を應用することも出來る。

亦諸君はカメラを持つてゐるならば、往來で種々雜多な人が歩んで居る。その歩行振りの變つた恰好な人があれば、チツト失敬して、これを應用しても面白いことである。

方法

それで應用の方法に就いて述べる。

日本人が和服の着てゐる人を描くに。寫眞がなくて、想像によつて描かねばならぬとき、多年の觀察と想像とを呼び起して、ペンを取つて見るが、なか〳〵思ふように描けないことがある。體を横向みの人を描くにも、眼はどう見えるか、肩はどうか、膝の邊はどうか、着物の皺はどうかと、いろ〳〵考へて見るが、なかなか思ふやうに描けないことがある。必ず着物の皺を間違へたり、視點の位置が胸の邊りと腰の邊りとを違へたりするものである。從つて滿足な畫が出來ない。これに反して、寫眞があれば容易く出來る。

例へばこゝに、一人の紳士が、街頭に死骸が横はつて居るのを

見て驚いて居る繪と假定する。そのとき寫眞より一人の人物を應用して、この紳士の脇に立たしたならば、紳士が何か驚きながら話し會つて居る繪が出來上る。この方法で、一枚の寫眞が他の種々な寫眞と結び付けて、變つた自由な繪が幾枚も容易く出來る。これが寫眞を應用するペン畫の方法である。これも技術の巧拙で。取り方によつて、竹に木を採いたような、不恰好なものになることがあるから、よく練習することが肝要である。亦寫眞の人物が、ペン畫に描き添へた人物との光線の方向、視點の位置が一致するように注意せねばならぬ。

ペン畫の參考になる、寫眞なり雜誌の挿繪等を保存して置くとペン畫を學ぶ上から便利である。

諸君は以上で、ペンに就て必要なことは理解されたであろうから、ペン畫を學ぶには本書の始めに述べたやうに、子供時代の無邪氣さに立歸つて、眞面目に勉められたい。

ペン畫の描き方　終

昭和十五年九月五日 改版印刷
昭和十五年九月十一日 改版發行

(停) 定價壹圓四拾錢
外地定價 壹圓五拾四錢

著者 樺島勝一
發行者 東京市神田區錦町三丁目廿四番地 米林保吉
印刷者 東京市麹町區九段一丁目四番地 海野勇助
東京市神田區錦町三丁目廿四番地
發行所 弘文社
振替東京三七六九番

文雅堂印刷所

ペン畫
版權所有
の描き方

文學博士 金田一京助 序閲・大原外光著

好評重版

啄木の思想と生涯

思想界の先驅者・詩歌壇の革命兒

石川啄木の思想全傳

日本が生んだ熱烈火の如き革命兒、時代の腦みを生涯に負ふて倒れた若き天才啄木は歌人詩人としてのみ知られてゐるが彼の晩年の思想は一大驚異である。本書は啄木の總てを傳へると同時に新しき日本を愛した彼の思想を紹介したもので啄木が畏敬の親友金田一先生は本書を序閲して惜しみなき讃辭を呈された以て其眞價を知ることが出來る。啄木研究者の必讀すべき良書である。

四六判上製最美裝
定價金壹圓五拾錢
送料拾貳錢

内容目次

啄木禮讃
啄木とその歌
一、「我を愛する歌」より
一、「煙」より
一、「秋風のこゝろよさに」より
一、「忘れがたき人々」より
一、「手套を脱ぐ時」より
一、「悲しき玩具」より
啄木の詩と詩論
一、あこがれ時代
一、心の姿研究時代
一、呼子と口笛時代
一、「食ふべき詩」
社會思想家としての啄木
啄木と農民思想
啄木の生涯
一、幼少時代
一、中學時代
一、「あこがれ」時代
一、新婚時代
一、北海道時代
一、東京の啄木
一、その晩年
一、故郷へ還る啄木

文學博士 金田一京助 序閲・大原外光著

新刊 大好評

啄木の生活と日記

新中判 最美裝 定價 壹圓廿錢 送料 拾錢

石川啄木の日記

本書は、日本が生んだ熱烈火の如き革命兒、時代の惱みを生涯に負ふて倒れた若き天才石川啄木の秘められたる、澁民村時代、北海道流轉時代、東京時代、晩年の日記に就いて、啄木が畏敬の親友たる金田一博士の校閲を享けて解說研究したものであつて、啄木愛好者の必讀書である。

内容

一、啄木と日記
一、啄木の歌と日記
一、澁民村時代の日記
一、北海道流轉の日記
一、東京時代の日記
一、啄木晩年の日記
一、「啄木日記」公刊に就て

大藏省 國民貯蓄奬勵局 推薦

不動貯金
銀行頭取

牧野元次郎著

・萬人必讀の國民讀本・

好評
重版

勤儉讀本

菊判和製
最美裝
定價壹圓
送料拾錢

文部省認定

木書は處世と致富の要道を說いたゞけでなく、更に一歩深く突進んで、生活の大本たる「勤儉の大精神」を奬勵が多年の經驗から實際生活の凡ゆる方面より具體的に敍述されたものである。而かも內容は通俗平易、加ふるに例話豐富、讀んで直ぐ其日から役立つ活きた「德數」であり「實學」である。洵に木書こそは現代人必讀の良書である殊にこれから世に出でんとする若き人々の指導書、卽ち商業學校、實業學校、靑年學校、女學校等の課外讀本として最良のものである。各學校で教科書として採用され以て木書の眞價を知られよ。

內容目次

第一章　勤儉の必要—勤儉とは—勤儉は何故必要か—勤儉は經濟的基礎を築く—勤儉は致富成功の道—勤儉と奢侈—勤儉は獨立の基礎を築く—勤儉精神—報恩感謝の念—勤儉の愉快—勤儉は人の義務—勤儉は神聖なり—勤儉の手本は大馬鹿

第二章　勤儉の心得—節儉と貧吝—調事を忽にするな—福に收入以下の生活—投機は絕對に避くべし—勤儉の第一障碍は見榮—雜志の愛讀が肝腎—克己心を養へ—家庭を定めて過慾せよ

第三章　勤儉の實行—實行と目的—理論より實行—働け働け餘分に働け—消費の合理化を圖れ—勤儉法いろ〳〵—一家擧つて勤儉力行—主人の勤儉—主婦の勤儉—子女の勤儉—雇人の勤儉

不動貯金
銀行頭取

牧野元次郎案

・牧野司郎畫伯挿繪

好評
重版

ニコ〳〵日記

四六判綿布上製
箱入最美裝
定價壹圓
送料十二錢

貯金と修養が得られて

三年繼用

が出來る便利な自由日記

一、日記は人生の貴き記錄であります。ニコ〳〵日記は我々の生活に最も必要なる修養と經濟を主として考案されたものであります。

二、而して修養はニコ〳〵主義を、經濟は貯金を主としたもので、そして何日からでも自由に記入が出來るよう編纂されたものであります。其處に他の一般の日記と全く趣きを異にしたところであります。

三、殊　三年間使用が出來る點で、例へば去年の今日は何を修養し儉約したか、來年の今日は如何にすべきか、比較對照しつゝ修養し且つ貯金するところに最も特色があります。ニコ〳〵貯金をお始めになるお方にはこの一冊で加入日から滿期日迄使用が出來ます。

四、ニコ〳〵貯金掛込日割表は、積金額に應じて其日其日の金額を貯へておきますと、月末には一定の掛金額に達しますから、知らず〳〵に貯金の目的を達せます。

五、ニコ〳〵貯金を御實行の御方には至極御便利です。

木書の定價はその三分の一が一年の使用料になります。其處に儉約の何であるかを表示すると同時にどの日記を使用するよりも經濟的であります。

大日本報德社副社長 佐々井信太郎序

東洋大學講師 中央教化團體主事 宮西一積著

好評重版

報德讀本

菊判 最美上製 定價壹圓廿錢 送料十二錢

文部省認定

日本圖書館協會
日本聯合青年團 推薦

二宮尊德翁の報德道は日本精神の一大表現であるのみならず、現實に新らしい思想と實踐を教へるものである。殊に無村社會が極度の窮乏を告げる今日、一元的世界觀に基いて人道を强調し報恩思想を鼓吹し、共同救濟を策し、道德經濟の一致を叫び、行動を尊重する二宮ドクトリンは、現狀打開に最も良き方法を提供するであらう。

今や報德を知らんとする者は誠に多く、亦それを述べる書も多いが、しかるに現代的理解に立ちて、平易簡明に、しかも體系的に其の全貌を傳へるものは殆んどない。本書はこの缺を滿さんが爲めに、翁の遺書一千卷を壓縮して其の眞髓を傳へたもので、我邦唯一の現代報德讀本である。

本書を一般家庭の人々を初じめ、全國の各學校、各教化團體、各社會事業團體、青年團、圖書館、役場等へお薦めする。

一氏義良著 **美術鑑賞教本** 中學・女學・師範學校用の美術鑑賞讀本 價一・七二 送料九

黑田鵬心著 **美學概論** 美學全般に就いて分り易く說かれた書 價一・七〇 送料一二

黑田鵬心著 **藝術概論** 藝術全般に就いて親切に說かれた書 價一・五〇 送料一〇

島崎藤村 山崎斌著 **藤村の歩める道** 文豪島崎藤村氏の藝術的な全傳である 價二・〇〇 送料一六

牧野元次郎著 **不動翁夜話** 昭和の『二宮翁夜話』である 價一・〇〇 送料一〇

中村岳陵著 **新日本畫の描き方** 日本畫を學ぶ人々の適當な入門書である 價一・五〇 送料一〇

下川凹天著 **漫畫人物描法** 漫畫を學ぶ人々の適當な入門書である 價一・五〇 送料一〇

旭正秀著 **創作版畫の作り方** 版畫を學ぶ人々の適當な入門書である 價一・八〇 送料一四

佐藤紅霞著 **世界性慾學辭典** エロチック全般に亙て解說せる辭典 價一・五〇 送料一〇

佐々木邦著 諧謔小說 **新夫婦日記** 素敵に面白い上品な諧謔小說である 價一・五〇 送料一〇

仲木貞一著 **發聲映畫脚本の作り方** トーキーシナリオの作法書である 價一・五〇 送料一〇

東西好角會編　明治・大正・昭和　大相撲土俵七十年
明治初年回向院時代から現在迄の大角力史
價一・二〇　送料一二

小寺融吉著　兒童劇の創作と演出
兒童劇脚本の作り方と演出に就いて親切丁寧に說いた書
價一・六〇　送料一二

藤井眞澄著　戲曲の創作と構想
劇の構成と脚本の作り方に就いて丁寧に說いた書
價二・〇〇　送料一四

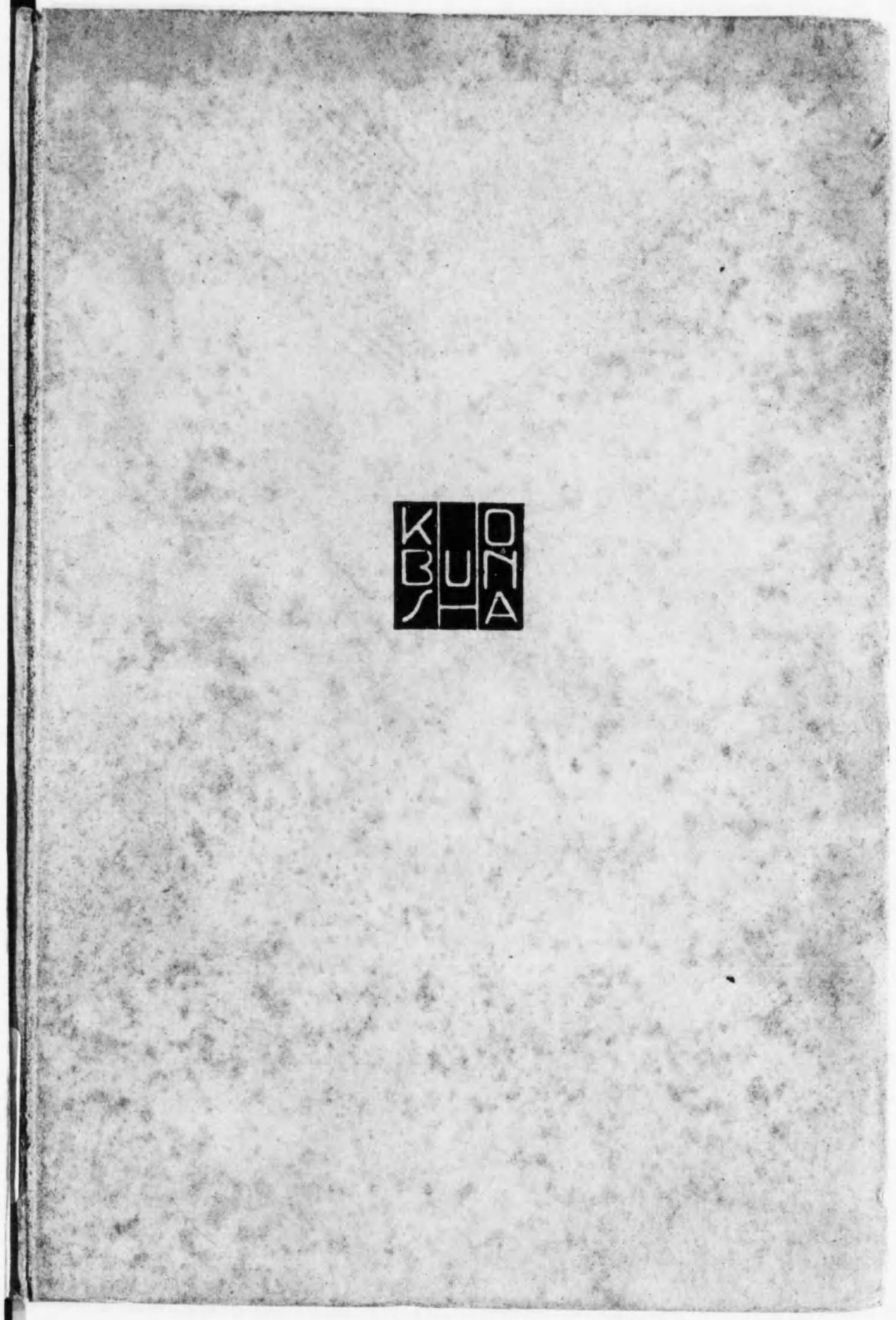
仲木貞一著　映畫脚本の作り方
映畫脚本の作り方に就いて親切に說いた書
價一・五〇　送料一〇

牧野元次郎著　上に立つ者の心得
出世せんとする人々の爲めに說かれた書
價・五〇　送料六

山內房吉著　マルクス思想讀本
マルクスの學說を分り易く說いた書である
價一・二〇　送料一〇

下川凹天著　漫畫スケッチブックと描き方
漫畫スケッチに就いて丁寧に說いた書
價一・五〇　送料一〇

鶴田吾郎著　曾宮一念著　油繪水彩畫素描の描き方
油繪水彩畫素描を學ぶ人々の手引書
價一・五〇　送料一〇

408
140

終